
コイン

莠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイン

【Nコード】

N3648D

【作者名】

莠

【あらすじ】

ある時は女を騙し、ある時は女を心から愛するー結婚詐欺師の純愛！（全14話）

1話 獲物

司会者の大袈裟な合図で、見合いパーティが始まった。
芝純一は30名の女たちに、ざっと視線を走らせた。

（獲物はお前か？ それとも金ピカ女か？）

ナンバープレートを胸に付け、プロフィールシートの交換。

純一はさりげなく相手の女の手を握るようにして、それを手渡した。

目星を付けた女にだけする純一のサインだ。

時間は3分間。

自己紹介にざっと目を這わせると、純一は職業と年収をチェックシートの上に素早く書き込んだ。

「女医さんですか。すごいですね」

「父の経営する病院を手伝っているだけですから・・・」

「あなたほどの人なら幾らでも相手はいるでしょう」

「医者って職業柄、意外と普通の男性からは敬遠されるんですよ」

「開業医の長女なら、医者同志で引く手あまたじゃないのですか」

「そうですね。でも、中々ご縁が無くって。

あっという間に30を過ぎてしまいましたわ」

森下 芳恵。

32歳。

職業 医師

年収 1000万円

住所 枚方市。

家族と4人暮らし。

性格 のんびり、明るい。

学歴 国立大卒。

身長 160センチ。

結婚歴 無し。

自己紹介をアチコチ見ながら

（年収は1000万か）

（開業医だからかなりの資産持ちだろう）

（容貌は並下だな）

純一が心の中で小さく呟いた。

「どんなタイプが好みですか」

「優しい人がいいかな。そして、包容力のある人なら」

「僕では駄目ですか」

「えっ！？ 急に言われても・・・」

芳恵がドギマギしている。

純一がじつと目を見て、芳恵の心の中を覗き込んだ。

芳恵は慌てて視線を外した。

（この女はあまり男を知らないかもしれない）

「映画が好きなんです」

プロフィールシートを見ながら、純一が言葉を出した。

「ええ」

「今度、ご一緒しませんか」

「・・・」

「楽しみにしています。では、芝生の芝です。」

「ご縁がありましたら、またお逢いしましょう。失礼します」

「失礼します」

純一は芳恵の目をじっと見詰めた。

（好きだよ）

心の中で熱く呟くと、純一は目に思いを込めた。

芳恵の目が恥ずかしそうに輝いた。

純一はチェックリストの芳恵の欄にダックマークを入れた。

3分間が終わり、次の相手に。

純一は平凡なOLや年収の低い年増女には全く関心が無かった。

次の相手も、次も、次も、次も・・・、関心は無かった。

外観が良くても、若くても、たとえ好みのタイプでも。

お見合いパーティに参加しているのは単なる情報収集。
獲物を捜すための手段でしかなかった。

次の相手の職業に、純一は興味を示した。

プロフィールシートには、

エステ経営。

年齢39歳。

一番大事な年収は書かれていない。
夏川絵美。

身長164センチ。

住所 芦屋市。

ひとり暮らし。

1回の離婚歴。

短大卒。

純一はプロフィールシートの交換の時、わざと手を握るようにした。
絵美の手は、エステを経営する者にふさわしい優雅な手だった。

純一はその手を見て、エステ経営が成功していると直感した。

「エステを経営されているのですか」

「まあ」

「たいしたもんですね」

「たいしたことありません」

「ええ」

上から下まで、シャネルで決めているゴージャスな女の口から、似
つかわしくない関西弁が……。

「何店経営されているのですか」

「北、南、神戸、京都の4店でんな」

「へえ、4店もですか」

「それなら年収は億ですね」

「半分も稼いでまへんわ。変なこと聞かんとして。それより、あんた独身か？」

「独身です」

「結婚はしたことはないんか」

「ええ」

「なんでや」

「たまたま縁が無かったもので」

そう言つて、芳恵と同じ答え方をしている自分が、純一は可笑しかった。

「あんた、バツイチでもええんか」

「そんなもん関係はないですね」

「夜は強いんか」

「試してみますか」

「今晚、試してもええか」

「じゃ、7時、花月の前で」

「曽根崎にあるお笑いの花月やね」

「そうです。最終投票には入れないで下さいね。」

僕も入れませんから」

「よっしゃ。そうするわ」

「じゃ、今日の7時、花月の前で」

「ほな」

絵美の目が淫乱に笑っている。

純一はクールな目でそれに答えた。

「時間がきました。席の移動はここで終わりにします」
司会者の大きな声が響き渡った。

フリータイムとなり、話をしたい相手と話し合える時間となった。

純一はわざと芳恵と絵美を外し、適当な相手と雑談をした。

芳恵と絵美をチラツと見る。

芳恵の粘っこい視線が自分を追い掛けている。

純一が女たちと笑い転げていると、芳恵の目はとても悲しそうだった。

絵美の視線は違っていた。

（覚えときや。あとで死ぬ位にいじめたるから、覚悟しとき）

そんな言葉が聞こえてきそうな、意味深な視線だった。

（獲物は餌に喰い付いた）

純一は長年の勘で、確かな手応えを感じていた。

フリータイムが終わり、最終投票に。

投票カードには第1希望から、第4希望の相手を記入出来る。

純一は誰の名前も記入せずに投票用紙を提出した。

「カップルを発表します。男性4番と女性15番、10番と3番、16番と21番、25番と11番、4組のカップルの誕生です。おめでとうございます」

司会者がカップルを発表するたびに歓声が上がった。

「カップルになられた男性は外で女性を待ち、後で退場する女性を優しくエスコートして下さい」

司会者はさらに発表を続けた。

「カップルにならなかった方も、アフターチャンスがございます。後日、気になる相手に連絡出来るこのサービスをご利用下されば、またチャンスが訪れます」

純一はアフターチャンスで芳恵の連絡場所を聞き、後日連絡するつもりでいた。

今日の獲物は絵美だ。

絵美の目を思い出すと、獲物にされるのは自分かもしれない、純一はそうも考えていた。

（喰うか喰われるか）

（だから、面白い。だから、止められないのかもしれない）

（報酬は幾らにするか）

純一は絵美の事を考えながら、阪急三番街からすぐ近くのマンションに向かった。

このマンションは1DKのウィークリーマンション。
3ヶ月位で引越すつもりでいた。

(7時までにはまだ3時間ある)
自宅に入ると、すぐパソコンのスイッチを入れた。

見合いパーティ『アゲイン』に電話をし、アフターチャンスで芳恵と絵美の住所と電話番号を聞き出した。

マイドキュメントから、`duck list`を引き出し、クリックする。

今日の獲物の詳細をパソコンに入力する。

ダックは今日の2羽を含めて、5羽になった。

この仕事は情報収集が命。

的が決まれば、ゆっくり、ゆっくり、気配を感じられずに、獲物を罠に追い詰めてゆく。

獲物が罠に掛かれば・・・絶対に逃がさない。

獲物からほんの一部の報酬を頂けば・・・自分の正体がわからない
内に行方を暗ます。

獲物を早めに逃がしてやれば、・・・獲物は狩人を恨まない。

グレーのスーツに、赤とグリーンのレジメンストライプのネクタイ。下着は新品の黒のボクサーパンツ。出来るだけ知的に上から中までを纏め上げる。

純一は適当に時間を潰すと、曽根崎通りにある花月に足を進めた。途中、自動販売機で栄養ドリンクを求め、純一はそれを一気に飲み干した。

「よし!!」

右手で拳を作ると、それを思い切り握り締めた。

純一は久し振りに命がけで仕事に取り込む覚悟でいた。

地下街で肉うどんを食べ、軽めに腹ごしらえを済ませると、15分前に花月の前で絵美を待った。

絵美が5分前に現れた。

絵美は真っ赤の皮のジャンパーの下にピンクのTシャツをさりげなく見せ、スリムなジーンズをカジュアルに着こなしている。

高級なシャネルスーツから見事な変身。敵にとって不足なし。

「待った？」

「いや、少し前に来たところだ」

「ご飯は？」

「済ませて来た」

二人を見れば、今日逢ったばかりとは、誰も思わないだろう。

「ほな、行こか」

二人はそこから歩いて5分位にあるラブホテルに向かった。

ホテル5番街の中に入ると正面に、部屋ナンバー、価格、空き室を表示したパネルにキーが掛かっている。

「どれでも好きな鍵をお取りやして」

ボックスのカーテン越しの小窓から、年配のおばさんの声が聞こえた。

「501号室がええわ」

絵美がホテルの最上階の部屋の鍵を取った。

「お帰りになる時はフロントまで電話しておくれやっしゃ」

二人は狭いエレベーターで5階まで上がった。

「ビジネスホテルみたいやろ。いつもケバイ事あれへん。そやから、うちはこのホテルが好きやねん」

絵美はこのホテルの馴染みらしい。

二人は部屋に入った。

部屋いっぱいキングサイズのダブルベッドが置かれている。

絵美が言うように、シンプルでラブホテルらしさが全くない。

6畳位の部屋の横にトイレ、洗面台、バスルームがある。

「シャワー一緒に入らへん」

「いいよ」

純一がシャワーを使っていると、絵美が入って来た。

「背中洗ったるか」

絵美がタオルにボディソープを付けて、純一の背中を洗い出す。

「やっぱりや。うちの想像した通りや。あんた、筋肉質のええ体してるわ」

「・・・」

「うちも洗ってくれへん」

純一が急いで絵美の背中を洗い、逃げるように先にバスルームを出た。

純一がベッドに寝そべっていると、絵美が体にバスタオルを巻いてこちらに来た。

「何で逃げるの。あれからがええとこやったのに」

（逃げたのじゃない。じらしたのだ。盛りの付いた雌豹めが）
純一は心の中で女を見下していた。

「俺は恥ずかしやがりなんだ」

「へえ、そうなん・・・。うちを見る。目そしたら許せへんで」

絵美はバスタオルを下にパツと落とすと、挑発するように全身を見せ付けた。

純一は無言で絵美の手を荒々しく引つ張ると、絵美を力付けで押さえ付けた。

「うっっんんんん」

絵美がうめき声を上げて死んだようになった。
純一が絵美を見詰めた。

絵美は目をしっかりと閉じている。
その時、絵美の目から一筋涙が零れ落ちた。

純一が涙に口付けし、涙を口で拭った。
絵美の目がパチリと開いた。
絵美は純一を力いっぱいに抱き締めた。

「やっぱり、うちの睨んだ通りや。あんたは最高や」
純一は首に回した絵美の腕をさりげなく振り解くと、素早く身支度を整えた。

「そんなに急がんかて、もっとゆっくりしたらええのに」
「急ぎの用があるので、悪いがこれで失礼する。」
勘定は済ませておくから」
純一がフロントに電話を入れる。

「待つて。連絡場所を聞いておくわ。教えてくれる」
「電話はこちらからするから」
「なあ、教えてえな」
「俺は忙しくて、普段は私用の電話には出ないのだ。
こちらから電話をするから待つていて欲しい」

「なんで、電話教えられへんの」
「言う事が聞けないなら、これで終わりにしよう」

「待つて。わかったわ。負けたわ。うちが待つわ。
その代わり、絶対電話をすると約束して」
「ああ約束するよ。近い内に必ず電話をするよ」

「きつとやで」

「ああ、わかった。じゃな」

フロントで勘定を済ませると、純一は5番街を足早に出て、夜の地下街の雑踏の海に潜り込んだ。

絵美は純一が忘れられなかった。純一の事を考えるだけで、頭が麻痺して、他の事は考えられなかった。

「芝 純一」

「芝 純一」

「芝 純一」

「芝 純一」

・

・

・

「芝 純一」

何度、この名前を呟いた事だろう。

寝ても、食べても、トイレ中も、仕事中も、ボーッとしてる時も・

・
絵美は純一の事を考えていた。

そして、絵美は一日中、携帯電話を見詰めていた。

逢いたい。
顔を見たい。
抱かれない。
声を聞きたい。
唇を重ねたい。
筋肉質の体に触れたい。
結婚をしたい。

電話は1週間しても掛かってこなかった。

初恋にうなされる小娘のように、絵美は純一にうなされていた。

『アゲイン』のホームページを見ていて、絵美はアフターチャンスがある事を思い出した。

「もしかしたら、電話番号がわかるかもわかれへん」

絵美は『アゲイン』に電話をして、純一の住所と家の電話番号を聞き出した。

急いで絵美は純一の家に入れた。

「お掛けになった電話番号は、現在使われていません。もう一度お確かめになって、お掛け直し下さい」

神戸の住所と電話番号は引越す前の住所と電話番号だった。

引越してからすぐに、純一が『アゲイン』に登録したのだ。
「連絡できへん。あの馬鹿は何で電話してけえへんねんやろ」

絵美は社長室の一輪挿しを壁に投げ付けた。

ガチャン!!

その時、携帯に公衆電話から電話が入った。
電話の相手は純一だった。

「もしもし芝です」

「あんた、8日もうちをほったらかして、何してんのん」

「悪い。つつい忙しかったもんで。今日は逢えるか」

「ちよっと待って。予定表を見るわ。ああ、大丈夫や」

「じゃ、7時、前の花月の前で」

「ああ、わかったわ」

二人は7時に花月の前で逢った。

5番街で二人は体を重ねた。

上機嫌の絵美が、帰り支度をしている純一に、微笑みながらベッドから話し掛けた。

「あんた、うちのパートナーになれへん」

「パートナー？」

「共同経営者や。京都と神戸の店の面倒見て欲しいねん」

「共同経営者か。いい話だな。

でも、俺も事業を始めようと思ってる所なんだ」

「それ、もう始めてるん」

「まだなんだ。

資金が少し足らなくて、いま資金集めで忙しく走りまわっているんだ」

「幾ら足らへんの」

「1200万円は集めたんだけど、
800万円がどうしても集められなくて」

「なあんや、それだけでええのんかいな。
それ位ならうちが出したるわ」

「それは出来ないよ。俺が何とかしてみせるよ」

「水臭い事言わんといて。その代わり条件があるわ。
その仕事がつましく行かなくなったら、
100パーセントうちのパートナーになりや」

「100パーセント？」

「せや、その意味はわかるやろ」

「ああ、まあな」

「そんならお金は任しとき」

「本当にいいのか。約束は必ず守るけど」

「決まりやな。今度逢う時に現ナマを用意したるわ。
うちな、見合いパーティの始まる前からあんたに目をつけとってん」

「ええ、どうして？」

「うちの好みのタイプやねん。
マスク、筋肉質の体、知性、それにテクニク。
あんたはうちには超サラブレッドや」

「俺がサラブレッドか」

「そや、あんたみたいな男はもう絶対に捜されへん。
うちのもんにしたいんや」

「俺も君の事が気になっていたよ」

「ほんまか」

「うち、超嬉しいわ」

そう言うと、絵美は純一を力いっぱい抱き締めた。

純一も絵美を形式的に抱き締めた。

（900万円でも良かったかな）

純一は壁を見詰めながら、算盤をはじいていた。

純一はあれから3日目に絵美に公衆電話から電話を入れた。

「もしもし、芝です」

「絵美やけど。今度はえらい早いな。」

前は8日もほったらかしといて。やっぱり、お金はモノ言うな」

「それなら、もっと後から電話を入れるとしよう。では、ま・・・」

「ちよい待ち。冗談やんか。あほ！」

お金の力でも、何でも、うちはあんたの声が、
はよ聞きたかったんや」

「俺も同じだ。お金を借りるなんて言わなければ良かった。
あの話は・・・」

「冗談や言ってるやろ。それで、いつ逢えるん」

「明日の予定は」

「待つてや・・・OKや。お金もそれまでに用意しといたるわ」

「済まない」

「あんたとうちの仲やないの。水臭い事、言わんといて」

「じゃ、午後7時花月の前で」

「めっちゃめっちゃ、楽しみにしてるわ」

「じゃ、明日な」

「待つてん！」

「プッププッ」

「待て！ 馬鹿たれ芝生！！」

あくる日の7時前、純一は黒のバッグを持って、花月の前で絵美を待つていた。

「あれ、持つてきたで」

カバンを少し持ち上げて、見せびらかすようにしながら、絵美が現れた。

「ありがとう。恩に着るよ」

「ちょっと見せたるか」

「ここではないよ。いつもの所へ早く行こう」

「それがええな」

二人は足早に5番街に向かった。

二人は502号室に入った。

「はよ！ 脱いで」

絵美はあつという間に裸になっている。

「よっしゃ。ベッドにうつぶせになって寝転んで」

「・・・」

絵美がルイ・ヴィトンの手提げバッグから1万円の札束を八つ取り出した。

「ええことしたるからな。楽しみにしとき」

ニンマリ笑うと、絵美が帯封のある札束を純一の背中の上にゆつくりと並べ出した。

「一つ」

「二つ」

「三つ」

「四つ。どや、気持ちええやろ」

純一は背中の上に金が並べられているのを感じながら、今日は命の限界まで仕事に励むつもりでいた。

「五つ」

「六つ」

「七つ」

「八つ」

「どや、重たいか」

「ずっしりと最高の重さや。ありがとう」

純一はゆっくり立ち上がると、札束を拾い集めた。

「これは有難く預かっておく」

急いで、純一は用意したカバンの中にそれを入れた。

「借用書はどうしよう」

「そんなもんいらん。

あんたがうちに尽くしてくれたら、それでちゃらや。
それより、はよおいで」

純一は真心を込めた。

それが、純一の精一杯のお礼だった。

純一は呼吸を整えると、素早く身支度を整えた。

ベッドには絵美が屍のように横たわっている。

「ありがとう」

軽く敬礼をすると、純一はバッグからメモとペンを取り出した。

先に失礼する。会計は済ませておくから。
お金ありがとう。感謝をしているよ。

芝

ベッドを見ると、絵美はまだぐったりとしている。
（お金は有難く頂戴する。俺の精一杯のお礼はしたつもりだ。
じゃ、元気でな）

純一は無言で絵美に語り掛けた。

純一はホテルの清算を済ませ、急いで5番街を出た。

（これで、絵美にもう逢う事は無いだろう。
この女なら1000万円以上頂けただろう。
しかし、欲を出して、警察に訴えられたら、命取りだ。
これでいい。次の獲物は芳恵だ）

純一は自宅のあるマンションに足を速めた。
ひと仕事が終わった。

汗が乾いた体を優しく撫でる4月の風が、純一にはたまらなく心地良かった。

絵美は苦しく切ない日々を送っていた。
純一を忘れられなかった。

知的で甘いマスク。
精悍な体。
紳士的な話し方。

とりわけ忘れられなかったのは、とろけるような口付け。

腕、足、耳、指の爪、髪の毛、唇

そして、鉄板のように硬くて厚い胸。

純一の全てが忘れられなかった。

純一と最後に逢った日の事を思い出すと、今も体の芯が疼いた。
しかし、あれ以来、純一からの電話は掛かってこなかった。

「あの馬鹿、何で電話をくれへんのや」

絵美は気が変になる位に純一を求めていた。

しかし、あれ以来、純一から電話は掛からなかった。
1日24時間。

眠りの中でさえも電話の音に聞き耳を立て、電話が鳴れば絵美は飛び起きた。

こんな状態で10日が過ぎた。

純一から連絡は無かった。

絵美は何が何でも純一を捜すつもりでいた。

時間とお金を幾ら掛けても。

たとえ、経営する4店を手放す事になっても、純一を捜す気でいた。

（あんな男はもういない）

そう思えば思うほど、逢いたい気持ちがぐらぐらと沸騰した。

純一を警察に訴える気は、海の砂粒の一粒さえも絵美には無かった。

純一は絵美の前から、永遠に姿を暗ました。

2話 出逢い

2話 出逢い

純一の母親の吉見たえが脑梗塞で倒れたのは、およそ1年前だった。右半身不随になり、それ以来、気分が余程優れない限りは、寝たきりの生活を送っていた。

吉見淳也は、芝純一の偽名で、それまで東京、福岡、名古屋で転々と今の仕事を行っていた。

母親の病気の再発を考え、いつでも対応できる実家に近い危険な大阪で、純一は仕事をするようになったのだ。

（母親が死ぬまでは、やばい大阪で用心深く仕事をするか）

獲物の情報収集に力を入れ、報酬は出来るだけ低く、引き際を出来るだけ迅速に。

無理をしないよう、欲を出さないよう、純一は仕事をしていた。

（警察に捕まり、母親を悲しませる事だけは死んでも避けたい）

純一は阪急電車の車窓を眺めながら、ぼんやりと母親の事や、大阪での

仕事の事を思い巡らしていた。

桂駅で電車が停車し、純一は電車から降りた。

純一は本名の吉見淳也に戻った。

（母親の顔が、また見られる。危険でも大阪に帰ってきて本当に良かった）

母親の元気な顔が見られると思うと、淳也は足早にタクシー乗り場に向かった。

ヘルパーの綾瀬　かなは昨日の夜、サービス提供責任者から勤務のシフトのメールを受け取っていた。

「2時から3時は吉見さんか」
かなは吉見さんの家に向かって自転車を勢い良く漕ぎ出した。

「今日は、綾瀬です」
かなは玄関を開けた。

「あつ！　くさい！！　何よ、この臭い・・・」
いやな予感がするなあ」

きつと、大便と小便の臭いが混ざり合っている臭いだろう。
息もしたくない。

「吉見さん、何かあったの？」
かなはたえが寝ている部屋まで走って行った。

「あつ！！！！」

かなは部屋を見て、ただただ呆然とした。

部屋中には、おむつとパットと柔らかい便と、ティッシュと着替えと座布

団と新聞・・・とが、あちこちに散乱していた。

それも、おしっこにぐちょぐちょに濡れた畳の上に。

おしっこのアンモニアの臭いプラス、大便のあの臭い。イコール、異様

な臭いが部屋中を占領していた。

たえは、なぜかベッドから落っこちて、ベッドにもたれてて座っていた。

左手は便にまみれ、着衣にも至る所に便がべたりと付いている。

何と、顔にまで便がべちゅと。

そして、たえは赤子のように、わあん、わあんと泣いていた。

「死にたいわゝ 死にたいわゝ。

後生 だから、殺して おくれ」

「大丈夫よ。大丈夫だからね。いま、いい空気を入れて上げるからね」

かなは急いで窓ガラスを開けた。庭からさわやかな風が入ってきた。

「ちょっと、待ってね」

かなは急いで自転車の荷台から非常用具を取り出した。

それは、あるおばあちゃん宅での事。

絨毯から床まで糞尿まみれの中で悪戦苦闘した時、自分の足や体中が便

だらけに。

そんな苦い経験から、古い雨靴と制服、ゴム手袋を荷台に常備するよう

になったのだ。

「これでよし」

玄関で非常用に着替えると、かなは太急ぎで、異臭が蔓延する部屋に戻った。

「待つてね。まず、ここを片付けてしまっわね。

それから、綺麗にしてあげるから。吉見さん、それまで待てる？」

「うん・・・」

たえがこつくりと頷いた。

「あつ、その前に顔と手のウンチだけ、ざつと拭いておこうか」

さくらは便と尿まみれの中を雨靴で、ざくつざくつとたえの所まで歩いて行った。

「雨靴に履き替えてよかったな。大胆に行動出来るわ」

かなはタンスの上から予備のティシュペーパーの箱を取り出すと、箱の上をバリバリと開けた。

「吉見さん、なぜ顔にウンチを付けているの」
「・・・」

「これで、綺麗になったわ。
後で、ウェットティッシュで拭いて上げるからね。
次は、手を出してくれる」

かなながたえの手の便を拭っていると、そこへ淳也がぬつと現れた。
「くさいな」。たまらんわ。いったい、お袋、どうしたんだい」

「ああ、 淳也 かい。 わあゝん、わあゝん。死に たい わゝ」

たえが淳也の顔をみると、またべそをかき出した。

「何が、あつたの」
「わあゝん、わあゝん」

「泣いているばかりじゃ、何もわからないじゃないか」
「息子さんですか。はじめまして、かななです。
今は、そつとして上げて下さい」

「はじめまして。お世話になります。淳也です。了解しました」
「それより、手伝ってもらっていいですか」
「わかりました。何をすればいいですか」

「その格好では何ですから、
まず汚れてもいいものに着替えてもらいますか」
「了解です」

淳也はかななの姿をじつと見詰めた。

「雨靴に、ゴム手袋か。さすがにプロだな」

淳也は2階の自分の部屋に走って行った。
かなはてきばきと片付け出した。

「何をすればいいですか」

「あらっ、早かったですね」

「あなたひとりに押し付けられませんからね」

（この人は優しい人だな）

かなは直感した。

淳也をかなが見ると、自分を真似しているのか、長靴とゴム手袋をはめ、古いジーンズとトレーナー姿だった。

かなは自分の真似をしているのが可笑しくて、心の中でプーと笑った。

（この人はこんな格好でも素敵な人だな）

異様な悪臭に包まれた汚物まみれの戦場にいて、かなはなぜか心がときめいた。

「じゃ、ゴミ袋を出して、汚物を皆その中に入れてもらえますか」
「了解です」

「あつ、それから、申し訳ないんですけど、
便はナイロン袋に入れてから捨ててもらえますか」

「またまた、了解です」

「出来ないモノは私がしますから、

別の所に纏めて置いておいて下さい」

「了解の了解です」

二人は真ん中にゴミ袋を置き、部屋の右端と左端に分かれて汚物を片付け出した。

「それにしてもお袋のやつ、

片手だけだよくこれだけ散らかしたものだな」

便の付いたティッシュを片付けながら、溜息交じりに淳也が呟いた。

「ベッドから落ちて、パニックになったのでしょうか。」

叱らないで下さいね。

年をいけば、誰でもいつかはこうなるのですから」

（それにしても、優しい人だなあ）

淳也は汚物を嫌な顔ひとつせず、てきぱきと片付けるかなを見て、暫しポッと見とれていた。

「息子さんのお陰で少し足の踏み場が出来たかな」

「淳也と呼んで下さい。」

かなさんの指示が無かったら、

僕なんかうるたえて固まっていますよ」

「慣れてなかったら、誰だってそうなっていますよ」

「かなさんで、こんな非常事態なのに、
すぐく落ち着いていますよね」

「落ち着いているなんて・・・。」

淳也さんで、私の事、大年増のヘルパーだと思っているんでしょう」

「と、とんでもない。」

若い人にこんな事までさせて申し訳ないと思っていますよ。
汚い事をさせて勘弁して下さい」

淳也が少し照れながら、頭をぺこんと下げた。

かなは薄情な家族を仕事を通して数多く見ていた。

「汚い事をさせて勘弁して下さい」

とストレートに言え、熱心に手伝う淳也に、かなは不思議なほど
好印象を持った。

「汚物は殆ど片付いたわね。」

次は雑巾で畳を拭きたいのだけど、淳也さん手伝ってもらえるかな
「当然、やりますよ。僕にもさせて下さい」

「じゃ、お願いしようかな」

「そうして下さい」

「淳也さん、少し熱めのお湯をバケツに汲んで下さる」
「了解です」

淳也がお湯の入ったバケツを二人の間に置いた。

「雑巾を少しきつめに絞って、

先程の要領で両端から中央へ拭いて下さい。

便と尿の付いている所はティッシュとウェットティッシュで
拭き取ってからお願いします」

「了解です」

「それから、雑巾は小まめにお湯で洗って下さいね」

「またまた、了解です」

二人は一生懸命に畳を雑巾で拭った。

たえが目をパチクリさせながら、仲良く後片付けをしている二人を交互に見ている。

たえの視線に、かなは気が付いた。

「吉見さん、もうちょっと待ってね。すぐに着替えさせて上げるから」

「すんまへん。堪忍してや」

「吉見さんたら、気にしなくていいのに」

「お袋、もう少しの辛抱だからな」

二人は畳をざつと拭き上げた。

「これで、よし。」

吉見さん、新しいおむつをして、着替えをさせてあげるからね」

「ありがとう」

「淳也さん、吉見さんの体を拭くから、別のバケツにお湯を汲んで下さる。それとタオルもね」

「了解」

たえの古いおむつはなぜか外れていた。

それで、便と尿がし放題になったのだらう。

「淳也さん、あつちを向いていてね」

「了解の了解です」

かなは便で汚れたたえの着衣を脱がし、便が付いたたえの顔と体を

ウェットティッシュで拭い去った。

次に、湯で絞ったタオルでたえの全身を何度も拭き上げた。
たえを寝かせて手早くおむつをすると、かななはネグリジエをたえに着せた。

「まあ、こんな所かな。吉見さん、綺麗になったでしょう」

「堪忍 や でえ」

たえは片手でかななを拝みながら涙を流している。

「淳也さん、もういいわよ」

淳也はかななに向かって拝み泣いているたえを見て、思わず涙が零れた。

「お袋！ ううううっ・・・」

「かななさん本当にありがとう。うううううんっ・・・」

「そんなあ。私まで涙が零れそう・・・」

かななは涙を流している二人を見て、もらい泣きをしている。

（この仕事をして良かった）

かななは腰が慢性的に痛む辛いこの仕事をして、これほど充実感を
味わ

った事は無かった。

「淳也さん、吉見さんをベッドに寝かせたいの。
また、手伝ってもらえるかな」

「心から了解です」

「よいしょ」

二人は力を合わせてたえをベッドに寝かせた。

「これでOKね」

そう言いながら、かんなが腕時計を見た。

「あつ、いけない。

予定より5分オーバーしているわ。失礼しなくちゃ」

「もう帰るんですか」

「ごめんなさい。次の仕事が待っているので。

淳也さん、もしよかったら、仕上げをして下さる」

「特別サービスの了解です」

「ベッドに吉見さんがもたれていたので、便が付いていると思うの。まず、それを片付けて」

「了解です」

「畳は先程ざつと拭き上げているから、もう一度丹念に拭き上げて欲しいの。

とりわけ、吉見さんが座っていた所、おむつを替えた所は入念に」
「了解の了解です」

「ゴミ、バケツ、雑巾、タオルなどの後始末をお願いね。
あと、換気は良くしてね。

扇風機があれば畳をそれで乾かして欲しいの。そんなもんかな」
「名残惜しい了解です」

「まあ、淳也さんったら……。吉見さん、さようなら」

「ご 苦労 さん」

たえはそう言つて、また片手でかんなを拝んでいる。

「また、来るからね」

「かんなさん、玄関で着替えて下さい。」

僕、その間に、雨靴とゴム手袋を水でざあと洗って置きますから」

「悪いわ」

「水で流すだけですから、すぐ終わります」

「じゃ、甘えようかしら」

「嬉しい了解です」

「まあ、淳也さんたら」

淳也は急いで水で洗おうと思つて、それらを見た。

「雨靴も、ゴム手袋も、便だらけじゃないか」

淳也は雨靴とゴム手袋に向かつて頭を下げた。

「感謝の限りです」

淳也は心を込めてそれらを水で洗った。

「お待たせしました」

「助かったわ。あらっ、いやだ。顔にまで付いているわ」

「何が・・・」

かんなはポケットティッシュで淳也の顔を拭いてやった。

「はい、これっ。ハンサムな顔が台無しですよ」

かんなが便を拭ったティッシュを淳也に渡した。

淳也がティッシュを広げて中を見た。

「急いで洗ったから、雨靴の便が飛び散ったかな。これで、ウンが付くかも」

「どんな運が付くの」

「ウンがとりもつ縁で、天使のように優しい人にめぐり逢えたし・・・」

「優しい人って私のこと。淳也さんだって優しいじゃないの。感動もんよ・・・」

ああ、残念。もういけないわ。

この続きは、またね。じゃ、失礼しまゝす」

「かななさん、本当にお世話になりました」

かななは全速力で自転車のペダルを漕ぎ出した。

淳也は直角にお辞儀をし、うしろ姿が見えなくなるまでいつまでもかななを見送っていた。

「それにしても、優しい人だな」

淳也はかななのケタ違いの優しさに心を打たれていた。

淳也はかななの言った事を守り、ベッドの便を落とし、畳を丹念に拭き上げ、後片付けを済ませ、扇風機で畳を乾燥させた。

「これで良し。かななさん、上首尾でしょう」

かななさんと、名前を口に出すだけで、淳也は今までに無く心がキーンとなった。

「お袋、綺麗になっただろう。良かったね」

「ありがとう」

「智子はどうしたんだい」

「外出や」

たえは妹の智子の家族と同居していた。

「お袋、なぜ、ベッドから落ちたんだ」

「おむつが外れて、左手で電話を取ろうとしたら、

落ちてしもてん」

「なぜ、こんな状態に」

「便が出たんや」

「下でか」

「そや」

「それで、こんなに散らかしたんか」

「情けのうて、情けのうて・・・」

そしてたら何が何やらわからうなうてしもうてな」

「そうか。そうだったんか。大変だったな」

「淳也。頼み事があるんや。聞いてくれるか」

「俺に何がして欲しいのだ」

「おねがいや。私を殺してくれへんか」

「えっ！！！！お袋を殺す。お袋・・・」

「そんな悲しい事を・・・」

淳也は母親の苦しみを知って、たまらなくなり、号泣した。

「うっ、うっ、うっ・・・」

「淳也。一生のおねがいや」

「俺が帰って来た言うのに、それはないやろ。うっっ、うっっっ」

「もう、みんなに迷惑かけとうないんや」

「親子やろ。迷惑かけたらいいんだ。

迷惑かけたら・・・う、うん、うっっんん」

「後生だから、首を絞めて・・・」

「お袋！！　うっっっっ、うっっっっ・・・」

淳也は涙をぼろぼろ零しながら、たえを力いっぱい抱き締めた。

たえの体は想像以上に痩せていた。

「淳也。くるしい・・・」

淳也は我に返った。

「悪い」

淳也は感情が込み上げてきて、たえを抱き締めるのに、力が入り過ぎた。

思わず、淳也は全身から力を抜いた。

たえは目をぱちくりとして、はあっはあっと大きく息をしている。

「殺してくれ」

と先程言っただけなのに、その言葉とは違う驚いた表情をたえはしている。

「勘弁しろよ。力が入り過ぎて」

「びっ くり した なあ。死ぬ かと 思った わ」

「殺す訳ないやろ」

「あん まり 驚い たら、お腹 が すい たわ。
何 か 食べ させ てえ な」

「殺せの次は、お腹がすいたか。まいったな。ちょっと待ちや」
「はよ して や」

「ラーメンでもええか」

「それで 我慢 する わ」

淳也はたえのためにラーメンを作った。

余りの驚きで、たえはパニックから、やっと落ち着きを取り戻したようだ。

淳也はそんなたえを見て、嬉しくて泣きながら、はしで麺をほぐしていた。

ラーメンの中には淳也の涙がいつぱいに入っていた。

「お袋、出来たで」

「待ち くれた びれ たわ」

「涙ラーメン1丁上がり」

ズルズルズルツ。ズルズルズルツ。

「こん な おい しい ラー メン 生ま れて 初 めて や
ゝ。」

また、作っ てえ なあ」

たえは猛烈な食欲でラーメンをすすっている。

糞尿だらけで、わあんわあん泣いていたので、余程たえはお腹がすいたのだろう。

ラーメンを無心に食べているたえを見て、淳也は大阪で仕事をする事を決断して、正解だったと確信した。

3話 邪魔者

3話 邪魔者

阪急梅田駅に着くと、淳也は偽名の純一に戻った。

母親のたえは、純一の顔を見たせいか、あれ以来驚くほど元気になつていた。

そして、純一を何度も笑わせるほど明るくなっていた。

（ kannasannyaのお陰だ。 また、逢つて感謝を言いたい）

純一は kanna の顔を思い描き、頭を下げた。

マンションに帰った。

純一は次の標的の情報を頭に叩き込むために、パソコンのスイッチを入れた。

Duck list を開く。

森下 芳恵

年齢 32 歳

身長 160 センチ

体重 55 キロ？

職業 歯科 医師

年収 1000万円

資産 かなり多い？

住所 枚方市・・・

家族 父、母、妹の4人暮らし

国立大卒

趣味 映画

性格 のんびり 明るい

結婚歴 無し

男性経験 男はあまり知らない 俺の直感！

携帯 電話番号 090・・・

純一はduck listの情報を頭に刻んだ。

見合いパーティから2週間ほど経っているので、芳恵は待ちくたびれて、あきらめかけている頃だろう。

「これだけ待たせば、そろそろいいだろう」

デスクのパソコンの横には、中ジョッキの瓶の中に100円玉が4分の3位入っている。

公衆電話用に用意しているコインだ。

純一はその中の一枚を天井すぐ近くまで放り上げた。

そして、落ちてくる100円玉を素早く右手で掴むと、それを左手の甲の上に置いた。

「裏だ」

コインはこれからの純一の生き方を暗示するように裏を指していた。

「やはり裏か。」

裏も表もコインのように

裏も表も俺だ！！

裏があるから、表もあるんだ」

純一はジョッキの中に手をつ込むと、ザクツと100円玉を鷲づかみで握り締めた。

マンションを出ると、純一は近くの公衆電話ボックスに滑り込んだ。

「もしもし、芝です」

「ええ、芝さん・・・」

「ええ、見合いパーティで映画を見に行こうとお誘いした、あの芝です」

「ああ、芝さんですか。」

私は縁が無かったと、もうあきらめていましたわ。

何か・・・」

「ああそうでしたか。」

わかりました。お電話して申し訳ありません。

それでは、これで、しつ・・・」

「あつ、お待ちになって。折角お電話下さったのに。」

そんなに慌てなくても。映画のお誘いではなかったのですか」

「実はそうなんです。」

電話が遅れたのは、あなたをお誘いする映画が、生憎無かったもので」

「そうでしたか。何かいい映画はございました」

「ええ、何とか。『ドリーム・レディ』は見られましたか」

「まあ、『ドリーム・レディ』」

私、とつても見たかった映画ですわ」

「ご都合はいかがですか。」

土曜日の午後なら、病院はお休みだろうと思ひまして」

「今日ですか」

「ええ。今は2時ですから5時頃、大阪まで出られませんか」
「どうしようかな」

「もうチケットは2枚購入しているのですけど」

「まあ、仕方のない人ね。それなら断れませんか」

「芳恵さんは、大阪はどの辺りをよくご存知ですか」

「阪急百貨店にはよく行きますので、あの辺りなら」

「その並びにある阪急交通社はご存知ですか」
「よく存じておりますわ」

「では、阪急交通社の前で5時に」

「5時ですね。では、失礼します」

妹の真美恵は姉の電話を盗み聞きしていた。

（あの嬉しそうな顔は何や。

どうせお見合いパーティで知り合つたろくでなしからの電話やろ。
私は絶対に安売りはせえへんからな）

3歳年下の真美恵は、結婚選りだけは姉には負けなくなつた。

姉は小学校から優等生で大学も国立。

妹の自分は、劣等生で医大にも行けず、やつとの事でお嬢さま私立
大学を卒業。

真美恵は小さい頃から姉と比べられ、劣等感の固まりに育てられて
いた。

（マスクだけは姉には負けてはいない。

この立場を逆転させるには結婚しかない）

真美恵はそう考え、芳恵の結婚相手には、並々ならぬ関心を抱いて
いた。

電話の内容から、男と今日の5時頃、大阪で待ち合わせをしている
事を、真美恵はつきとめた。

「つけてやる。どんな男か拝んだるわ」

真美恵は探偵のようにどこまでもつける覚悟でいた。

芳恵は飛び上がるばかりに嬉しかった。

「僕では駄目ですか」

と言いながら、最終投票には自分を入れなかった憎い男。

「今度、ご一緒しませんか」

と言いながら、2週間も連絡して来なかった恨めしい男。

あきらめようと思えば思うほど忘れられない男。

その男が芝純一だった。

芳恵は精一杯のおめかしをして、京阪枚方市駅から淀屋橋に向かった。

妹の真美恵はつばの大きな帽子で顔を隠し、芳恵をピタッと尾行していた。

淀屋橋から地下鉄に乗り換え、梅田駅に着くと、芳恵は足早に待ち合わせ場所に向かっていった。

真美恵は人込みの中を必死で尾行を続けていた。

純一は15分前から待ち合わせ場所に立っていた。

（相手がかんなならどんなに胸が弾むだろう）
一瞬、そんな思いが脳裏をよぎった。

「かんなさん勘弁してください」

純一は心の中でかんなに謝った。

「お久し振りです」

そこに芳恵が現れた。

「お久し振りです。突然、電話をしたので驚かれたでしょう」
「いいえ、とても嬉しかったです」

グレーのスーツを知的に着こなしている芳恵が、純一の目を見て呟いた。

二人はシネコンが入っているビルの6階にある食堂街のレストランで食事を済ませた。

そして、8階のレビオシネマコンプレックスへ。

映画が始まるまで、二人は今まで見た感動の映画を話題にして立ち話をしていた。

そこへ、尾行を続けていた真美恵が現れた。

「あらっ、お姉さんやないの。偶然やね。今から、映画・・・」
「あっ！ 真美恵。どうしてここに」

「ショッピングの帰りに映画でも見ようと思ってな」
「何を見るの」

「『ドリーム・レディ』かな。お姉さんは・・・」
「ええっ！ あなたも」

「お姉さんもそうなん。偶然ってあるねんなあ」
「それより、そちらの人は誰？ 私にも紹介してえな」

「仕方ないな。こちらは芝さん。これは妹の真美恵です」
「真美恵です。よろしうに」

「芝です。よろしく」

「えらい素敵な人やけど、お姉さんいつたどこで知りあつたん」
「これっ、失礼な事を言つてからに。真美恵はあっちにお行き」

「はい、はい。私は邪魔みたいやから失礼するわ。
芝さん、ほな、また」

「失礼します」

芳恵は真美恵が去つてほつと胸を撫で下ろした。

（ろくでなしと思つたら、知的でえらい好みのタイプや。
芳恵なんかに、死んでも渡せへんからな）

真美恵は芳恵に対する敵対心をめらめらと燃やした。

二人は劇場に入り、中央よりやや後方、通路左から3番目と4番目の席に腰を掛けた。

真美恵は二人より斜め後方に席を取っている。
映画が始まつて15分位すると3番目に座っている純一の横に、ひとりの女性が座つた。

純一が何気なく横を見た。

「あっ！」

純一は思わず小さな声を上げた。
横に座つたのは真美恵だった。

「この席空いているみたいやから、私が座らしてもらっわ」
芳恵は真美恵を見て、大きな溜息を付いている。

純一がスクリーンに目を戻した。

スクリーンでは、黒人女性グループの迫力のある歌と、ゴージャスなショーが・・・。

その時、真美恵の左手が純一の右手を包むように握った。

真美恵の手は純一の手を自分の方へいざなった。

そして、その手は自分のスカートの中へ。

太腿の辺りに純一の手を誘うと、その手はさらに奥の柔肌に押し当てた。

「ええ！まさか・・・」

純一はギョツと驚き、思わず自分の手を力ずくで引つ込めた。

真美恵を見た。

「ウツ、ウフ、ウフッ」

真美恵は暗闇の中で薄ら笑いを浮かべている。

「＊＊」

真美恵が純一に無音で意味深に語り掛けた。

恐らく真美恵は口の動きから、馬鹿と言ったのだろっ。

「まいったな」

真美恵という女の登場は純一の全くの想定外だった。

この女は、純一の仕事上、一番嫌なタイプの女だ。

嫉妬心、独占欲が強く、淫乱で、薄情な女。

こんな女に限って、何か事があると、騒ぎ立て、警察にすぐに訴える。

仕事柄いろんなタイプの女を見てきた純一は、真美恵をこう分析していた。

目は映画を見ているが、頭はこの仕事のシナリオの変更を倍速で考えていた。

この仕事を中断するか。

それとも、続行するか。

続行するなら、速攻、縮小に切り替えるか。

純一の考えがまとまらないうちに、映画が終わった。

芳恵が劇場のトイレに立ち去った。

真美恵が純一に近寄った。

「電話番号を教えてくれへん」

「芳恵さんにも教えてないのに、教える事は出来ない」

「それやったら、これ渡しておくわ」

純一がメモを見ると、真美恵の携帯の電話番号とメールアドレスが書かれていた。

「必ず、電話してや。きつとやで」
「・・・」

純一は沈黙しながら、

（腹は決まった。速攻で行くか）
と、心の中で呟いた。

「お待たせ」

芳恵がトイレから帰って来た。

「私たちは寄る所があるので、真美恵はひとりでお帰り」
「ひとりにするん」

真美恵は不服だったが、渋谷姉の言葉に従った。

（その代わり、地獄の果てまでつけてやる）

真美恵はバッグの中から帽子を取り出すと、それを深めに被り、二人を尾行し始めた。

二人はエレベーターが満員なので、エスカレーターで下へ。

3階に着く直前に純一が振り返った。

やはり、上の方に真美恵の姿があった。

真美恵が尾行しているのに気が付くと、純一と芳恵は3階で降りるやい

なや、近くの店に身を潜めた。

別のエスカレーターで上に上がると、二人は6階の喫茶店に入った。ウエイトレスがコーヒーをテーブルに置いて、去って行った。

「真美恵さんがつけていますが、あれは家からですね」

「ええ、そんな・・・」

「間違いありません」

「真美恵は何を考えているのでしょうか」

「映画を見ている時、真美恵さんは僕の手をスカートの中に入れました」

「えっ！ そんな事までするのですか」

「それだけではありません。

あなたがトイレに行っている間に、僕に電話番号を教えろと迫りました。

もちろん、断りましたが」

「あの子ったら・・・」

「断れば、このメモを」

そう言つて、純一は真美恵が書いたメモを芳恵に渡した。

メモには真美恵の名前と携帯の電話番号、メールアドレスが書かれている。

その筆跡は芳恵には確かに見覚えがあった。

真美恵が書いたものだった。

「僕は芳恵さんを裏切る気持ちはありません」

そう言うと、純一はテーブルに置かれているメモを取り、それを粉々に破った。

芳恵は自分より美人で若い真美恵に乗り換えることなく、

「裏切る気持ちはありません」

と、言い切る純一に深い慈しみを感じた。

（この人は信頼できる人だ）

芳恵は、そう確信した。

「真美恵さんのためにも、

早く二人の仲をはっきりさせないといけませんね」

「そうですね」

「したくても、今の僕にはそれが出来ないのが残念です」

「どうして出来ないのですか」

「それは・・・」

「どうしてですか」

「それを片付けてからあなたとの仲をはっきりさせようと思っていたので・・・」

「言って下さい」

「実は・・・実は友達の借金の連帯保証人になっていまして。

友達は事業が失敗すると失踪してしまったのです。
それで、借金は僕が・・・」

「幾らあるのですか」

「500万円の内、300万円は返して、
後200万円残っているのです。」

サラ金なので早く返さないと・・・」

純一は最初、報酬は芳恵の年収1000万の半分を考えていた。
シナリオ変更で200万に削減したのだ。

「なあんだ。200万円か。」

それ位なら私の小遣いの範囲内で何とでもなりますわ」

「とんでもない。あなたにはお借り出来ませんよ」

「心配なさらしないで。それ位なら私がご用立てしますわ」

「それはいけません。話さなければ良かったな」

「私に払わさせて下さい。」

これは、真美恵に乗り換えず、

女のプライドを守って下さった私からのお礼です」

「それは当たり前前の事ですから」

「お願いします」

「そこまで言われるのなら、甘えてもいいのでしょうか」

「どうぞ、そうして下さい。」

次にお逢いする時にお金はお持ちしますわ」

「ありがとうございます」

芳恵は、純一だけは何としても真美恵に奪われたく無かった。

（真美恵は子供の時から自分の物を欲しがる癖があった。
おもちゃとは違うのよ）

200万円はその為の保証金。

純一みたいな男とは、もう二度とめぐり逢う事は無いだろう。

そんな男をこんなはした金で引き止められるなら、返ってこなくても、芳恵は少しも惜しくは無かった。

（これで女のプライドが保てるわ）

芳恵は喜んで200万円を用意するつもりでいた。

次の土曜日、純一は芳恵に電話を入れた。

「もしもし、芝です」

「はい、芳恵です。」

あら、芝さん、先日はいろいろとありがとうございました」

「明日の日曜日は都合はいかがですか」

「ええ、大丈夫です」

「大丈夫ですか。ところで、近くには真美恵さんはいませんか」
「いないみたいです」

「どこかで聞いているとも限りませんから、
芳恵さんは、はいといいえだけで答えてもらいますか」

「わかりました」

「2時で時間はいいですか」

「はい」

「場所は前の所で」

「はい」

「明日を楽しみにしています」

「私も楽しみにしております」

「では、さようなら」

「失礼します」

芳恵は心が浮き立った。

土曜日に電話がかかる予感がしたので、芳恵は200万円を昨日のうちに用意をしていた。

（芝に思い切り抱き締められたい）

芳恵は32年の歴史の中で一番ときめき、輝いていた。

真美恵はあれから1週間、ずっと携帯電話を眺めていた。

必ず、芝は電話をしてくると思っていたのに、電話は掛かって来なかった。

（何でや。私の方が芳恵よりもずっと美人や。

体つきやスタイルも絶対に負けてへん。

せやのに、何で電話をせんのや。

あほ！。芳恵を選んでみろ。殺したる！)

ガッチャン。

芳恵のコーヒーカップを真美恵は思い切り床に叩き付けた。

コーヒーの飲み残しと割れたコーヒーカップの破片が床に散乱している。

真美恵は荒れに荒れていた。

日曜日。

朝から芳恵は真美恵の動きに細心の注意を払っていた。

真美恵がトイレに入ると、普段着のまま大急ぎで芳恵は家を出た。

紙袋の中にお気に入りの服を入れ、後で着替えるつもりになっていた。

梅田に着くと、芳恵は着替えを済ませ、普段着をコインロッカーに預けた。

途中、何度も振り返ったが、真美恵はつけていなかった。

12時前に梅田に着いたので、芳恵は食事やウィンドウショッピングで時間をつぶした。

芳恵が待ち合わせ場所に行くと、芝はすでに来っていた。芝の腕には、ショッピングバッグがぶら下がっている。

「お待たせしました」

「いいえ、僕も今来た所です」

そう言つて、純一は真美恵がいないか左右をキョロキョロ眺め回した。

「今日は大丈夫だと思います。用心してまいりましたから」

「ああ、そうでしたか。それは、良かったです」

「今日は芳恵さんと二人っきりで映画を見ようと思つているんですよ」

「えっ、二人っきりで映画を」

「ホテルで映画を見るんですよ。ワインを飲みながらね。と言っても、絶対に何もしませんから」

「ホテルで映画ですか。で、何を見るんですか」

「僕、いち押しの作品です。楽しみにして下さい」

「わかりました」

「いいですか」

「私は構いませんよ」

二人は待ち合わせ場所からすぐ近くの新阪央ホテルへ。

純一はフロントで予約したエグゼグティブ・ツインの部屋のキーを受け取った。

「この部屋は広いんですね」

「40平方メートル以上ありますかね」

二人はテーブルを挟んで椅子に座った。

「忘れない内にお金をお渡ししますわ」

「本当にいいのでしょうか」

「前にも言いましたように、真美恵の誘惑に乗らず、私を選んで下さったお礼ですわ」

「では、ご好意に甘えます」

「そうなさって下さい」

「借用書は？・・・」

「そんなもの必要ございませんわ。お礼ですから」

「ありがとうございます」

純一はショッピングバッグの中から皮のバッグを取り出し、お金をその中に入れた。

（今度はこちらがお礼をする番だ）

純一は心の中でそう呟くと、ショッピングバッグの中からDVD、ワイン、紙に巻いた特製のワイングラスを取り出した。

そして、テーブルの上に置いた。

「僕のお勧めの映画は『華麗なるワッツビー』」

1970年代に作られた1作目と最近もう一度制作されたリメイク

版の2作なんです」

「タイトルだけは知っておりますわ」

「2作続けて見ると、中々興味深いですよ」

そう言つて、DVDプレーヤーにリメイク版をセットすると、純一はテレビの前に椅子を2つ並べた。

映画が始まり出した。

純一はドイツ製の白の最高級アイスワインを長く細めのワイングラスに注いだ。

トクットクットクツ。

ワインのいい香りが辺り一面に広がった。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

芳恵はひと口、口を付けた。

「まあ、何ておいしいの。トロリと甘く、まるやかで芳醇。こんなワイン、私生まれて初めてですわ」

「それは、良かった。いい映画には、いいワイン。どちらも心ゆくまで楽しんで下さい」

純一はリメイク版が終わると、続いて1作目をセットした。
1920年代のアメリカ。

上流社会の女を愛した男の野心と純愛を描いた名作を、二人はソフ

アーを並べて楽しんだ。

「2作品を続けて見ると、興味深いし、良くわかりますね。私はめがねの看板が印象的でしたわ。……」

二人は1作目と2作目の違いや描き方について、長時間に亘って語り合った。

そして、よく笑い、ワインの瓶を二人で空にした。

「こんなに男の人と語り合ったのは初めてですわ」

「僕もこんなに話が弾むとは思わなかったな。」

映画って本当にいいですね」

そう言いながら、純一がショッピングバッグの中に手を入れた。

「芳恵さんに、これをプレゼントします」

「これは何ですか」

「僕からのお礼です。開けて下さい」

「何かしら。まあ、何て素敵なの。カメオのペンダント。」

頂いてもいいんですか」

それは、花をモチーフにしたフランス製のカメオのペンダントだった。

「これは僕のほんの気持ちばかりのお礼です。ぜひとも、受け取って下さい」

「嬉しい！今日は何て素晴らしい日なの。」

このワインのようにとろけそうな一日でしたわ」

「そんなに喜んでもらえれば、光栄です」
「本当にありがとうございます」

純一が帰り支度を終え、部屋を出ようとしていると、芳恵の貼り付くような視線に気が付いた。

「本当に何もして下さらないのですか」

「ええ、何もしないと約束しましたからね」

「私ってそんなに魅力がございませんの」

「そんな事はありませんよ。」

「だけど、今日は僕の我ままにさせて下さい」

「そんな約束なんか、破って下さればいいのに。
仕方がございませんわ」

二人は沈黙のままホテルを出た。

純一は地下鉄御堂筋線の梅田駅まで芳恵を送った。
その間、芳恵は一言も語らなかった。

芳恵は改札口と通ると心なしか寂しそうに去って行った。

（深い関係になると、もつともつと辛くなる。勘弁しろよ……。
本当にありがとう。元気だな。

妹の真美恵には気を付けなよ。じゃあな）

純一はちょびり不満そうな芳恵の背中に向かって、心の中で呟いた。

この瞬間から、純一は芳恵の前から姿を消した。

芳恵はカメオのペンダントを見ながら涙を流していた。
涙が次から次から頬を伝う。

まるで泉のように、涙が体の奥から湧いて来る。
芳恵の目は少し腫れていた。

純一から1週間以上連絡は無かった。

もう、電話は掛かってこない予感が、芳恵の胸を張り裂いた。

「あの時、なぜ抱いて下さらなかったの」

「電話はなぜ下さらないの」

「真美恵の事が原因なの」

芳恵が幾ら質問をしても、答えは返って来なかった。

芳恵は、突然姿を消した純一が忘れられなかった。

恋しさと切なさの余り、芳恵は純一を恨みがましく思っていた。

しかし、警察に訴える気は髪の毛の1本も無かった。

4話 傷

4話 傷

「帰らん とつて。 帰らん とつて。
帰ったらいやや」

淳也の母のたえは、ヘルパーのかんなの手を左手で掴んで離さなかつた。

「お願いや。ひとりにせん とつて」

「許してね。また夜に来たあげるね」

かんなはたえの手を優しく離れた。

すると、たえはめそめそと泣き出した。

たえの目から、ポトン、ポトンと涙が落ちる。

「いやや。うっ、うっうっ、うっ、うっ・・・」

たえの顔は鼻水と涙でぐちゃぐちゃになっている。

「嫌だわ。吉見さんたらっ」

かんなはたえの顔をティッシュで拭いてやった。

そして、かんなはたえを抱き締めて、頬をすり付けた。

「また、来るからね。それまで、待っていてね」
「うっん、うっ、うっうっう」

「じゃ、帰るね」

「・・・」

かななは次の仕事を終えて、夜にまた子供を連れて来ようと思っていた。

「失礼します」

「ご苦労様」

玄関口で淳也の妹の智子がかんなに挨拶をした。

智子は母の長期の看病で心身共に疲れていた。

智子は母と二人っきりで顔をつき合わせていると、時々、発狂しそうなになった。

それで、気晴らしに、京都や大阪でショッピングをして、智子は憂さを

晴らしている。

（母の事は出来るだけヘルパーに任せよう）

智子は最近、そう考えるようになっていたのだ。

純一は仕事を終えたので、また母親に会いに行く為に阪急梅田駅に向かっていた。

電車に乗り、座席に座りながら、純一は今回の仕事を振り返っていた。

（真美恵の登場は全くの想定外だった。

速攻に切り替えて正解だったかな。欲を出せば、危ない所だ）

純一は短期に事が運び、ほっと胸を撫で下ろしていた。

（かななさんに、また逢えるだろうか）

母親の顔を見るために大阪で仕事をするようになっていたはずなのに、い

つしか目的が変わっていた。

純一は電車のスピードを遅く感じながら、母親のいる実家に向かっていた。

かななは仕事を終え、食事を済ませると、子供の勇太と自転車で8時頃に
たえの家に来た。

「吉見さん、また来たよ」

そう言って、かななはたえの部屋に勇太を連れて入って来た。

「ありが とう。ありが とう」

「吉見さん、今日は子供の勇太を連れて来たよ。勇太、ご挨拶は」

「こんばんは」

「お 利 口 さん や な」

「お い く つ」

「5才」

勇太は片手を広げて元気に言った。

「吉見さん、淳也さんの勇太位の時って、どんな子供だったの」
「淳也 かい。寝 小便 ばかりしとつたわ」

「寝小便？ まあ、吉見さんたら」

「何 て 言い 訳 した か 当て て み」

「もうしませんかな」

「い い や」

「何て、言つたの。吉見さん」

「それは な」

「吉見さんのいけず」

「言つ て あげ よ か」

「吉見さん、お願い。早く言わないと、もう来ないわよ」

「よっ しゃ。 淳 也 は な」

「何て、言つたの」

「ちんちん汗かいたゝ ちんちん汗かいたゝ 言つてな」

「ちんちん汗かいたと言つたの。まあ、淳也さんたらっ」

かなはそれを聞いて笑い転げた。

（あの素敵な淳也さんが、そんな事を言うなんて、想像出来ないわ）
淳也の顔を思い描くと、かなは可笑しくて可笑しくて笑いが止まらなかった。

「とうがらしみたいになちんちんやで。
それが、汗かいて、ふとんに地図描ける
訳無いやろに」
そう言つて、たえまで大笑いしている。

そこへ、淳也が帰つて来た。
そして、淳也が澄ましてたえの部屋に入つて来た。

たえとかんは顔を見合わせると、また笑い転げた。
「何や、人の顔を見てそんなに笑うなんて、失礼じゃないか」
「あつ、寝小便のおっちゃんや」

話を聞いていたのか、勇太までそう言つと、たえとかんはまた
笑い出した。

「寝小便のおっちゃんって、おじさんの事か」
「そうや。おっちゃん、ちんちん汗かいたんか」

「これ、勇太。駄目よ。ご免なさい、淳也さん。
いま、吉見さんに淳也さんの子供の頃の話聞いていたの」
「寝小便の話だろ。お袋、頼むよ。変な事は言わないでくれよ」

「ええやないか。今の話やないんやから」
「今する訳無いだろう。まいったな。もう帰つてやらないぞ」

4人は寝たきりの病人がいる事も忘れ、笑いながら楽しく語り合つた。

「よう わろ たわ。今日は楽しかったわ」
「こんなに楽しそうなお袋の顔を見るのは何年ぶりだろう。」

みんな、かなさんのお陰です」

「私は何も。吉見さんって、すごく面白いの。私可笑しくって、涙が出たほどです」

「良かったな。お袋。ありがとう、かなさん」

「いいえ。あつ、いけない。

もう、こんな時間だわ。帰らなくちゃ」

時計は9時を過ぎていた。

「かなさん、遅いから、僕が送って行きます」

「送ってもらわなくても、結構ですよ」

「いえ、送らせて下さい」

「送ってもらい」

「じゃ、そうしようかな」

「そうして下さい」

大枝南福西町のたえの家から、大枝西新林町のかんなの住む市営住宅まで、自転車で約10分ほどの距離だった。

「眠たいよ」

眠気が催したのか、勇太がしきりに目を手の甲で擦っている。

「困ったな。これじゃ、勇太は自転車で帰れないわね」

「僕がおぶって行きます」

「えっ、淳也さんが。歩けば大分ありますよ」

「大丈夫です」

「申し訳無いわ」

「そうさして下さい」

「じゃ、甘えてもいいかしら。

勇太の自転車はここに置かせてもらっていいですか」

「どうぞ、どうぞ」

淳也は勇太を背中に背負った。

かなは自転車を押して、二人は並んで歩き出した。

「わあ、すげえ高いや。ママ！見て見て」

目を擦っていた勇太は、淳也の背中の上ではしゃいでいる。

「今度、3人で遊園地に行きたいな」

「連れて行ってやる」

「ほんと、寝小便のおっちゃん」

「これ、勇太。謝りなさい」

「ご免なさい。おっちゃん、でも、約束やで」

「ああ、約束だ」

「やった〜。わあ〜い、わあ〜い」

「いいんですか」

「男の約束です。」

ユニバーサル・ムービー・ジャパン
UMJ

に3人で行きましょう」

「良かったね、勇太。この子ったら、現金ね。
もう、スヤスヤ眠っているわ」

「安心したのでしょうか」

「UM」は、私、まだ行った事無いの。
一度、行って見たいと思っていたから、私も楽しみ」

「それは、良かった。楽しみにして置いて下さい」

「淳也さん、勇太、重くありません」

「大丈夫です」

3人は和やかに語らいながら歩いていった。

「私が住んでいる団地が見えて来たわ」

「あの前の団地ですか」

10棟位の5階建ての建物群が前方にそびえている。

「やっと、着いたわね。淳也さん、重たかったでしょう」

「大丈夫です」

3人は団地の入り口を入り、 kannaの住む8棟の入り口に向かった。
入り口の階段にひとりの男が座っていた。
kannaの前の夫の前崎孝太だった。

「えらい、遅かったやないか」

「何の用」

「立ち話も何やかから、中で話そうやないか」

「私はあんたなんか話しなんか無いわ。
もう、あんたとは赤の他人や。」

話があるのなら、ここで話して」

「そやから、その関係を元通りにしようと言ってるのやないか」

「私はそんな気、全く無いから帰って」

「勇太の事を考えたれや。もうじき小学校やで」

「今頃、何を勝手な事を。その勇太を捨てたのはあんたや」

「あれは、ほんの浮気や。本気や無いのはわかつとるやろ」

「もう、あんたとは離婚が成立してるじゃないの。」

「私らの事はほつといて」

「そんなもんどつにでもなる。もう一度やり直そう」

「私はそんな気無いから、早く帰って」

「さあ、頭を冷やして中で話そう」

そう言つと、前崎はかんなを家の中に引き摺りこもうと、かんなの手を無理やり引つ張つた。

「止めて。淳也さゝん」

「その手を離して下さい」

「何や、お前は。関係無いやろ。引つ込んでろ」

「その人は、私の婚約者や。これで、わかつたでしょう。わかつたら、早く帰って」

前崎は淳也を見て、かんなの手を離した。

かんなは淳也のそばに走って行つた。

「かんなさん、勇太君をお願いします」

「はい、わかりました」

淳也は背中の勇太をかんなに渡した。

「お前ら、いつからや」

「ずっと、前からよ」

「もう、出来てるんか」

「それやったら、何が悪いの。あんたには関係無いやろ」

「この野郎、俺の女に手を付けやがって」

「もう、あんたの女じゃ無いわ」

「うるせえ」

前崎は淳也の胸倉を鷲掴みにした。

「止めて下さい」

淳也は腕に自信があつたが、前崎と戦う気は無かつた。

万一、怪我でもさして、警察沙汰になる事を恐れたからだ。

「ふざけやがって」

前崎は淳也の胸倉を、さらにきつく締めた。

「止めて下さい」

「この野郎、俺の女に手を出しやがって」

そう言つと、前崎は淳也の顔面を拳で思い切り殴り付けた。

ガッン。

強烈な一撃。

淳也は思わずよろけた。

情容赦なく、もう、一撃が。

ガッン。

淳也の唇の辺りが切れて、血が流れた。

ガッツン。

次の、強烈過ぎる一撃で、淳也は崩れ落ちた。
倒れる淳也のみぞおち辺りを、前崎は右足の靴の先で力任せに蹴り上げた。

「うつうつ」

淳也は余りの痛みに悶えた。

さらなる、前崎の蹴りが今度は顔面を狙っている。
その前に、淳也は顔面と頭を咄嗟に両腕でガードした。

ブシッ。

蹴りの鈍い音がした。

「うつうつ」

「止めて。止めないと、警察を呼ぶわよ」

かななは携帯電話を今にも警察に掛けるしぐさを見せながら、大声を上げた。

「畜生！意気地のねえ野郎だ」

前崎は警察という言葉に反応したのか、淳也を蹴るのを止めた。

「母親なら、少しは勇太の事を考える！」
捨て台詞を残して、前崎は去って行った。

「淳也さん、大丈夫。まあ、ひどい怪我だわ」

「僕なら、だい、大丈夫です」

家に入って手当てをしなくちゃ」

「大丈夫です。これで、帰ります」

「駄目よ。手当てをしなくちゃ。

私のためにこんなになったのに。私に手当てをさせて」

「すみません」

かなは勇太を背負い、301号室の自分の部屋に淳也を連れて行った。

3人は部屋に入った。

かなは淳也の目の脇と唇の止血をし、そこにバンドエイドを貼った。

「みぞおちと腕を蹴られたようだけど、大丈夫」

「大丈夫です。普段から鍛えていますから」

「腕をめくって見せて」

「うわあ、青くなっているわ」

「これ位なら」

「トレーナーを着ていて良かったわね。

さつきは、淳也さん、ご免なさいね」

「何をですか」

「私が淳也さんの事を婚約者って言ったでしょう。

ああでも言わなければ、前崎は引き下がらないと思ったの。

許してね」

「僕は嬉しかったです」

「ええ、本当に」

「本当です」

「こんな、子持ちでもいいの」

「僕はかなさんの家族になれたらいいな、と思っていましたから」

「私の家族に！！ 本当に本当」

「本当に本当に本当です」

かなは感激して、胸が熱くなった。

（かなさんの家族になれたらいいな）

（何て、素敵な言葉なの。これって、プロポーズなのかな）

かなは嬉しくて、淳也の胸に飛び込んだ。

「いてててて。今日は勘弁して下さい」

淳也はみぞおちの辺りを押さえて、思わず呻き声を上げた。

「あらっ、ご免なさい。」

私ったら、嬉しさのあまり、

淳也さんが怪我をした事を忘れていたわ」

「ああ、みぞおちの辺りがズキズキ痛む」

「淳也さん、服を持ち上げて。見て上げるわ」

「わかりました」

「あら、すごいあざになっているわ。
病院に行った方がいいのじゃない」

「少し、様子を見てみます。」

「じゃ、こんな状態ですから、僕はこれで失礼します」

「ひとりで帰れる」

「大丈夫です。何とか、帰ります」

淳也はみぞおちの辺りを押さえながら、帰って行った。

（3人が家族になれば、どんなに素晴らしいだろう。
でも、待つてよ。

勇太がパパの事を寝小便のおっちゃんと言ったりして・・・）
そう考えると、かななはプーと吹き出した。

淳也が歩いて家に着く頃には、みぞおちの痛みは少し楽になっていた。
た。

淳也は上半身を裸になり、洗面所の鏡に蹴られた辺りを映していた。
「大分あざになっているが、これ位なら大丈夫だ」

そこに妹の智子が現れた。

「あら、兄さん。怪我をしているけど、喧嘩でもしたの」

「ああ、ちよつと」

「ヘルパーなんか送らなくていいのに、余計な事をするからよ」
「もう、いっぺん、言ってみろ」

「何度でも言っ上げて上げるわ。余計な事をしなくていいのよ」
「お前がお袋の事を何もしないから、仕事以外の時間まで、

あの人がお袋の世話をしているのと違うのか。
送るのは当たり前だ」

「何よ。私が何もしなただって。

私がどれだけくたくたになって介護したのか、何も知らないくせに」

「以前はそうかも知れない。

しかし、最近はお袋から逃げているのじゃないか」

「くたくたに疲れたのよ。

夫だってこんな環境がいやになり、

最近では家に帰って来なくなったわ。

みんな、母さんのせいよ・・・」

そう言つて、智子が泣き出した。

「母さんのせいにするな」

「何よ。兄さんなんて・・・」

智子は涙で言葉にならない。

「・・・母さんのせいで・・・

母さんのせいで私の家庭は崩壊してるのよ」

「・・・」

「兄さんはいったい何をしようの。

みんな、私に押し付けてばかりじゃないの。

私は気が狂いそうなのよ」

「何を」

「ギヤアアアアアア~~~~」

智子が悲鳴とも呻き声ともわからぬ奇声を上げた。

淳也は智子が気が変になったかと心底驚いた。

リン、リン、リン……。

その時、居間の電話の音が鳴った。

「はい、吉見です」

淳也が電話を取った。

「お願いや。私を殺して。

淳也、お願いや、首を絞めて」

電話を掛けたのは、母親のたえだった。

枕元の携帯電話から電話をしたのだろう。

「お袋！」

電話の主がたえとわかった、淳也はたえの部屋まで走って行った。

智子も電話の音で我に返り、淳也の後を追いつけて行った。

「私のせいや。私がみんな悪いのや。
堪忍してや」

たえは二人を見ると、頭を深々と下げた。

「これが精一杯や。

土下座もできへん。

情無いなあ」

そう言つて、たえは顔をゆがめて泣いている。

「お袋、大きな声を出して許してくれ」

「母さん、ご免な。こんなに苦しめて」

智子はたえに謝りながら、涙を流している。

「私のせいで、兄弟喧嘩はやめて
お願いや。胸が苦しゅうなるわ」

「俺が悪かった。金輪際、智子とは喧嘩はしない。

二人に誓うよ。智子、許してくれ」

「喧嘩を売つたのは私の方よ。兄さん、ご免ね」

「智子、許してや。」

病院か施設に入れてくれたらええで」

「母さん、私が悪かったわ。

一番苦しいのは、母さんやいう事忘れていたわ」

「仲直り出来て嬉しいわ。

淳也、頼みがあるねん」

「また、首を絞めてとも言つつもりか」

「いいや。ラーメンが食べたいねん」

「脅かすなよ。頼みがあると言われるとドキッとするよ。
ラーメンか。よし、飛び切りうまいやつを作つてやる」

淳也はラーメンを3杯作った。

「淳也のラーメンはおいしいねん。
智子も食べてみ〜」

「いただくわ」

二人は仲良くラーメンをすすっている。

たえは子供のように、ラーメンを嬉しそうな顔をして猛烈に食べている。

「うまいなあ」

おいそうに食べるたえの顔を見ると、淳也は幸せな気分になった。

二人を見ながら、淳也もラーメンをすすった。

「あつ、いててて〜」

先ほど、殴られた唇の辺りが、ラーメンを食べるとヒリヒリする。

淳也はみぞおちに目をやった。

蹴られた傷より、寝たきりのたえを持つ心の傷の方が、

淳也には何倍も何倍も痛みが大きかった。

5話 失敗

5話 失敗

淳也から偽名に戻った純一は、マンションでパソコンを見ていた。
Duck listを開き、ひとりの女性のプロフィールを画面
に映し出す。

花岡 麻由美

年齢 52歳

住所 神戸市・・・

学歴 高卒

身長 158センチ

体重 58キロ？

未亡人 6カ月まえに夫を癌で亡くす

生命保険 6000万円 本人の証言

遺産 3000万円 殆どが夫の退職金 本人の証言

職業 無職 生活は遺族年金

家族 ひとり暮らし 娘がひとり 結婚して別居 本人の証言

趣味 海外旅行（主に娘と）

電話 090・・・

この獲物は前の住所のもので、淳一が別の見合いパーティーで知り
合ったものだった。

麻由美は亭主を無くして6カ月位だったので、もう少し寝かせてから、純一は仕事をするつもりでいた。

（まもなく1年だ。そろそろいいだろう）

ワインと同じように、獲物にも、寝かせた方がいいものもある。純一はジョッキの瓶に手を入れ、100円玉を片手いっぱいに掴んだ。

「もしもし、芝です。」

6カ月程前に見合いパーティでお逢いした、芝生の芝です」

「ああ、思い出しましたわ。芝生の芝さんね。よく、覚えておりますわ」

清掃のパートをしていた麻由美は、掃除機の先を下に落とした。

麻由美は普段の喋り方をよそ行きに替えて、気取って電話の応対を始めた。

「ご主人を無くされて、1年ほど経ちますが、もう大分落ち着かれましたか」

「まだまだ、ですねん・・・いや、ですよ。でも、少し慣れて来ましたわ」

「それは、良かったです。」

一度、お食事でもと思い、お電話を差し上げたのですが、明日、土曜日のご都合はいかがですか」

明日は都合よく清掃の仕事は休みだった。

麻由美は猫なで声で電話を続けた。

「明日の午後なら都合が良くつてよ。夕方からは予定がありますが」
清掃の仕事が休みの土日、麻由美は回転寿司のパートの仕事を夕方からしていた。

「それなら、12時。阪急三宮の駅前の広場で」

「あそこなら良く存じていますわ。」

じゃ、明日12時。楽しみにしていますわ」

「それでは、失礼します」

電話が終わると、麻由美は携帯電話を握り締め、腕を大きく手前に引いた。

「よっしゃ」

麻由美は仕事を中断してトイレに行くと、自分の顔を鏡に映した。

「どうや、私も捨てたもんやないやろ。16歳年下のええ男やで。これやから、お見合いパーティはやめられんのか」

麻由美は50歳の頃から、お見合いパーティに足繁く通うようになっていた。

目的は2つ。

1つはパートの仕事から拾い上げてくれる頼りがいのある結婚相手を探す事。

2つめは年下の素敵な男性と燃えるような恋をする事。

その為に、麻由美はお見合いパーティが始まる前に、相手をざっと

物色し、どちらにするかを決めていた。

あの時は2つめ。

狙いは芝生の芝、ただひとり。

プロフィールは、1つめと2つめでは替えていた。

若い獲物は9000万円という餌に引っ掛かった。

あとは、釣り上げて、料理をするだけ。

焼くか、煮るか、刺身にするか。

ピチピチ跳ね回る魚をよだれを垂らしながら、頂くとするか。

（うまいやろなあ）

麻由美は思わず生唾を、ゴクンと飲み込んだ。

土曜日の阪急三宮駅前広場は、いろんな若者がたむろしていた。朝から晴れ。

2つのバンドが路上ライブを代わる代わる繰り広げている。

純一は待ち合わせ時間の10分前から、プロ顔負けの演奏を聞いていた。

「お待たせ」

「今来た所です。食事は何がいいですか」

「お任せしますわ」

（あれっ、同じじゃないか）

純一は麻由美の服装が、1年前のお見合いパーティの時と同じ事に気が付いた。

紺色の地にピンクの花柄のワンピース。そして、真珠のネックレス。

（少し変だ。

9000万も持っている女が前と全く同じ服装をするものなのか。余程、おしゃれに無関心か。それともけちけち女か）

純一の勘が黄信号を灯した。

純一が近くのホテルの中華料理店『CHINA CHINA』に麻由美を連れて行った。

二人は海鮮飲茶コースを頼んだ。

暫くすると、海鮮入り冷菜盛合わせを黒のチャイナドレスを着たウエイトレスが運んで来た。

それを摘みながら、純一が言った。

「これなかなか、うまいですよ」

「本当、おいしいですわ」

次に、ふかひれスープ、続いてエビのチリソース、飲茶・・・が。デザートを食べながら、純一が麻由美に尋ねた。

「海外旅行には行かれませんか？」

「最近、ハワイに行つて来ましたわ」

「ハワイは何回目ですか？」

「2回目ですわ」

「アラモアナには行かれたか？」

「それ、何ですの」

「ノースシヨアはどうでした？」

「さっぱり、わかりまへんわ」

「じゃ、ハワイのどこに行かれました？」

「ワイキキですやん」

「それ以外は？」

「ビーチですやん。海ばかり行ってましたわ」

（この女はハワイには行っていない。

そして、都合が悪くなると、この女の会話には関西弁が入り出す。
と言う事は、この女は普段は関西弁で喋っているのか）

「そんなことより、折角ホテルまで来ている事だし、
中に入って楽しんで行きません」

「今からですか」

「そうよ。たつぷりと可愛がって上げるわよ」

（この女は嘘で固めている。

と言う事は、生命保険金の6000万も
遺産の3000万も嘘か。

道理で、金の事を自分からべらべら喋っていたな。

あんな情報を鵜呑みにするなんて

俺も焼きが回ったかな。

金の無いババアなんか

引っ込んでいやがれ)

「何を考えてるの。考える事なんかないじゃないの。早く行きましよう」

「今日は駄目なんだ」

「どうして」

「喧嘩をして腹を蹴られて痛むのだ。顔にも傷があるだろう」

「本当ね。だけど、残念よね。ここまで来て」

「またにしてくれ」

「ここは大丈夫なのでしょう」

麻由美は椅子をずらすと、純一の股に手を這わせた。

「やめないか」

「痛くないように工夫して上げるわよ」

「いい加減にしろ」

純一は椅子から立ち上がると、勘定を麻由美に任せ、ひとりでエレベータに乗った。

そして、閉じるのスイッチを素早く押した。

「待ってよ」

その声を遮断するように、エレベータの扉が閉まった。

純一はこの瞬間から、麻由美の前から姿を暗ました。

情報収集の甘さを、純一は反省していた。

（本人の証言には、とりわけ用心しなければ）
気を取り直して、純一はパソコンの d u c k l i s t を開いた。

本多 美和子

年齢 60 歳前後

身長 150 センチ位

体重 55 キロ位

株 多数保有 西和証券にて知り合いに

以下、不明

純一は見合いパーティに加えて、証券会社の窓口、キャバクラ、クラブなど、金を持っていそうな女がいる所で獲物を捜していた。

本多 美和子とは西和証券で何度か会い、良く話をするようになった。
ていた。

純一は美和子の事を頭に描き、阪急梅田駅の近くにある西和証券に向かっていた。

純一が西和証券のパソコンで株の動きを見ていると、女が声が掛けて来た。

「どや、儲かってるか」
声の主は美和子だった。

「なかなか難しいですね」

「そやけど、色気のある株やなあ。ああ、震い付きたいな」

美和子がパソコンの画面を見ながら言った。

「えっ、何という株ですか」

美和子が純一の耳元で息を拭き掛けるように囁いた。

「あんたの事やがな」

「ぼ、僕が色気のある株ですか」

「そや、あんたは、女をくらくらつとさせる色気のある株や。
女の人生を暴落させる危険な香りはするけどな」

「・・・」

「そや、うちが言っから間違いないわ」

「そうですかね」

「あんたに頼みがあるねん」

「何ですか」

「うちと夢のようなデートをしてくれへんか」

「夢のようなデート?」

「うちには夢の一日や。」

その代わり、お礼に投資資金を用立てたるわ」
「投資資金って」

「そやな。300万円出したるわ。
それだけあったら、ひと勝負できるやろ」
「まあ、そうですね」

「どや、うちとデートをしてくれるか」
「いいですけど」

「よっしゃ。そしたら、決まりでええなあ」
「ええ」

「そしたら、この証券会社の前で明日の11時30分までどうや」
「わかりました」

話が決まると、純一は先に証券会社を出た。
（夢のようなデートとはいったいどんなデートだ）
（60歳位の女に震い付かれたらかなわんな）
あれこれ考えながら、純一は自宅のあるマンションに戻った。

あくる日、純一は11時30分丁度に証券会社の前に行った。
美和子はすでに来ていた。
手に一泊旅行でも行くような大きなバッグを持っている。

「遅かったな。もう、けえへんかと思たわ」
不満そうな顔をして、美和子が口を開いた。

「今が11時30分ですよ」

「まあ、ええわ。ほな、行こ」

「どこに、行くのですか」

「ちよっと早いけど、リッチに食べに行こ。ついといで
そう言つて、美和子が純一と腕を組んだ。」

「梅田のど真ん中で腕を組むのですか」

「ええやんか。」

これが、うちの夢のようなデートのスタートや。
大阪中の人間をびつくりさせたいんや」

行き交う人が驚いて振り返っている。

（どんな関係や）

（若いくせに、あの男は物好きやなあ）

そんな声が、純一には聞こえてきそうだ。

美和子の今日の服装は、お腹が突き出た黒の長めのスカート。
そして、黒っぽいブラウスに豹柄のベストを羽織っている。

首には、キンキラキンの長くて太いネックレス。

純一が目を覆いたくなる絵に描いたおばはんスタイル。

純一は紺のブレザー、チャコールグレーのスラックス。
中に、白のポロシャツで決めている。

美和子は阪急デパートに気取りながら、入って行く。

「デパートに行くのですか」

「そうや」

二人はエレベータで8階の食堂街に。

美和子は純一と腕を組んでスカイ大食堂に入った。

（これが夢のデイトに登場するレストランか。

お子様ランチでも食べさせるつもりか）

純一は大きな溜息をひとつ付いた。

二人は子供たちを横目で見ながら、椅子に腰を掛けた。

「何でも、好きなもんを食べてええで。

ただし、１０００円以内でな」

「ええつ、１０００円以内」

（金を持っている奴ほど、金には細かい。

大食堂で１０００円以内とは。この女はかなりのけちだぞ）

純一は呆れながら、ハンバーグランチを頼んだ。

美和子も同じものを頼んだ。

「ああ、リッチに食べたわ。

こんなにリッチに食べたのは久し振りや。

寿命が延びたわ」

（どこがリッチなんだ。

これで寿命が延びるなら、俺なら８００歳以上生きられるわ）

二人は食事が終わると腕を組んで、阪急三番街の高速バスターミナルに向かった。

「いったい、どこに行くのですか」

「これからが夢のデイトのメイン・イベント。

有馬クアセンターに行くんや」

「有馬のクアセンター」

「そや」

「僕は風呂に入る用意なんか、何もしてませんよ」

「あんたのタオルや下着はうちがみんな用意してるから心配せんとき」

「えっ！！下着まで」

「はいてびっくり玉手箱。うふふふ。楽しみにしとき」

「まいったなあ」

「どや。昼間から温泉やで。リッチやろ」

（日帰りの公衆温泉に入って、どこがリッチなんだ）

それに、下着まで用意するなんて。

何を考えてるのか、60女は怖すぎる）

純一は関西弁丸出しのけち女には、ほんと付き合いきれないと思っていた。

二人は高速バスを1時間位乗り、神戸電鉄 有馬温泉駅に付いた。そこからは、送迎バスで有馬クアセンターへ。

美和子是有馬クアセンターに入ると、誰かを捜しているのか、辺りをきよろきよろと見渡している。

「ここや、ここやで」

美和子が大きな声を上げると気が付いたのか、60歳前後のおばちゃんの団がこちらに向かって走って来た。

「待ってたんやで」

「思つとつたより、ええ男やなあ」

「あんたはオーバーに言うてると思つていたけど、電話より上玉や」

「私らにも、はよ紹介してえなあ」

おばちゃんの一団は、みんなで4人だった。

「慌てるとき！喫茶店に入ってから、ゆっくり紹介したるわ」
4人は美和子の温泉仲間だった。

有馬クアセンター内の喫茶店に、6人が入った。

「はよはよ、紹介してえな」

テーブルに着くや否や、その内のひとりが口を開いた。

「よっしや、紹介したるわ。」

その前にひとりずつ自己紹介をしてからや」

「じゃ、うちから言うわ。うちは森君子です。よろしゅうに」

「私は、小田秋江です。お見知りおきに」

「私は川口清美です。お初にお目に掛かります」

「うちは千葉弘子です。よろしく」

4人が自己紹介すると、美和子がにやにやしながら純一を皆に紹介した。

「この人は、芝純一言つて、うちのこれや」

そう言いながら、美和子が左手の小指を1本立てて、自慢そうな顔をして、皆に見せた。

「よろしく」

いやいや、純一が挨拶をした。

「年は幾つでっか」

「まだ、ピチピチの30代やで。なあ」

「ああ」

美和子に続いて、純一が不機嫌な顔で頷いた。

「どこで知り合いになったん」

「それは、企業秘密や」

「いつからやの」

「つい、最近や。なあ」

「・・・」

「私もデイトしてくれへんかなあ」

「あかん。絶対あかん。手を出したら、承知せえへんで」

4人が質問すると、答えは美和子がした。

「もう、深い関係になつてんのか」

「それは、想像に任せるわ」

「ええなあ」

「うちも欲しいなあ」

「年いった男は臭うて汚いだけやけど、若い燕はたまらんなあ」

「ほんまや。そやけど、何で男は年取るとあんなに臭いんかなあ」

「腐つてるのやろ」

「おならばっかりしてるから、

おならの臭いが染み付いてるのとちゃうか」

「とにかく、臭いわ」

「若い男は違うわ。」

男らしい臭いがたまらんけど、年いった男は臭うてたまらんわ」

「ほんまや。ほんまや」

「うはっはっはっは・・・」

4人の女たちは言いたい事を言っつて笑い転げている。

純一は聞いてられないので、立ち上がった。

「風呂に入るわ」

「そうか、そしたら、タオルと下着を渡したるわ」

美和子がタオルと下着を純一に渡そうとした。

「あっ、どんな下着やの。見せてえな」

「うちも見たいわ」

「よっしゃ、見せたるわ。ジャーン」

美和子が皆に見せびらかすようにブリーフの両端を引っ張って見せた。

「わあ、超ビキニの紺色のブリーフやないの」

「ぞくぞくするほどセクシーやな」

「はいた所を見たいなあ」

「美和子はええなあ」

「羨ましいわ」

純一は黙ってそれらを驚掴みにすると、大浴場に足早に向かった。
途中、純一はゴミ箱にブリーフを投げ捨てた。

（棺桶に片足を突っ込んだおばんが何を血迷っているんだ。少しは、年を考えると）

クアセーターに来て以来、純一は頭に来ていた。

（幾ら仕事とはいえ、俺にも我慢の限界がある）

怒りを静めるために、純一はゆっくりと金泉に体を沈めた。

先日、蹴られた傷は少し増しになり、青く沈んだ色も大分薄くなっている。

純一は金茶色の温泉に、さらに深く体を沈めた。

温泉の水が湯船から溢れて流れている。

大阪での疲れが、純一は温泉の水と共にざあっと流れて行くように思えた。

二人は阪急三番街の高速バスターミナルに着くと、近くの喫茶店に入った。

「今日は夢のデイトにに応じてくれてありがとうございます。すっごい楽しかったわ」

「ああ」

「お礼に約束通り300万円を明日用立てたるわ。それまでに借用書を書いという」

「信用書？」

「当たり前やろ。借用書も無く、誰が金を貸すねん。」

「そんなもん、いてへんわ」

「・・・」

「もし、あんたがどろんしたらどうするねん。
警察にも訴えられへんわ」

「警察に」

「そや。それと、利子として、年利5パーセントもらうわ。
サラ金に比べてべらぼうに安くしてるやろ。
借用书に書かんとして。別にお礼としてもらうわ」

「そう言う事だったのか」

「そや」

「そしたら、行こか」

「どこに行くのですか」

「夢のデイトのフィナーレにラブホテルに行くつもりやけど」

「僕はそんなもの行きませんよ」

「年利5パーセントが不足か。しゃあないな。
そんなら、半分に負けとくわ」

「じゃ、これで失礼する」

「よっしゃ。清水の舞台から飛び降りて、1パーセントで、どや」

「いいかげんにしろ。俺を舐めるな」

純一は美和子の驚く顔を後にして、喫茶店を出た。

（前回といい、今回といい、全くの完敗だ。

2回も続けて失敗するなんて、ここ最近では珍しい。

安易過ぎたのか。

獲物の選択を間違ったか。

情報不足か。

情報が取れない獲物もある。

喜んで金を差し出すためには、惚れさせるパワーが弱いのか。

つまりは、俺の驕りか。

そろそろ、退け時かもしれない）

失敗を反省しながら、純一はマンションに帰った。

純一はパソコンのスイッチを入れ、duck listを開いた。
東京、名古屋、福岡のリストは、証拠隠滅のために、すでに消してある。

神戸が

成功例が 2羽

失敗例が 1羽（花岡麻由美）

大阪が

成功例 2羽

失敗例 1羽

残り 2羽

これが現在パソコンに残っているduck listだ。

純一は成功例と失敗例をもう一度丹念に分析してみた。

（3回も続けて失敗する事は出来ない）

純一は禪の紐をギュッと閉め直した。

6話 恐竜

6話 恐竜

約束の日は晴れだった。

「わあゝい。わあゝい」

「良かったわね、勇太」

「寝小便のおっちゃん、約束守ってくれた」

「これ！勇太。」

寝小便のおっちゃんは絶対に言ったら駄目と言ったでしょう」

「わかった。言わへん」

「じゃ、ママに指切りをして」

「うん。するっ」

二人は指切りをした。

「本当にもう言わないでね」

「言わへん」

かなは朝、6時に起きた。

かなが朝食を作っていると、勇太が目を擦りながら、起きてきたのだ。

余程、UMJに行くのを楽しみにしていたのだろう。

数日前に夜、淳也から電話が掛かって来たのを、かなは思い出していた。

「次の休日はいつですか」

「日曜日です」

「じゃ、日曜日に大阪で待ち合わせしましょう。

勇太君とU M Jに行くのを約束しましたので」

「いいのですか」

「男の約束ですから」

かなは電話の一部分を思い出すと可笑しくなった。
（男の約束ですって。5歳の男の子をつかまえて）
かなはぷんと思い出し笑いをした。

淳也とは9時30分にJ R大阪駅の中央改札口の前で、かなは待ち合わせを約束していた。

「かなさんの家族になれたらいいな」

かなはこの言葉の真意を、もう一度この機会に、淳也に確認する覚悟でいた。

かなと勇太は待ち合わせ時間の20分前に、J R大阪駅の中央改札口に着いた。

「おっちゃん、遅いな。まだかな」

「もう来るわよ」

「勇太、絶対にあれを言っちゃ駄目よ」

「寝小便のおっちゃん？」

「そうよ。指切りしたからね」

「絶対に、言わへん」

「なら、いいわ」

5分ほどすると、淳也が現れた。

「あつ、おっちゃんや」

勇太が淳也に手を振った。

「早かったですね」

「この子が急がすもので」

「そうでしたか」

「おっちゃん、はよ行こ。はよはよ」

勇太が淳也の手を引っ張った。

「わかった。わかった」

3人は環状線で西九条まで行き、JRゆめ咲線でユニバーサルシティ駅へ。

ゲートの前で、

「やったあ」

勇太ははしゃいで、飛び回っている。

チケットを求めると、3人は早速UMJ内へ。

そこは、まるでアメリカだった。

「わあ〜い。わあ〜い。わあ〜い」

ぬいぐるみのウッドパッカーとシュロツクとエラモが3人を熱烈歓迎。

シュロツクがふざけて勇太に後ろから抱き付いた。

「ヒュウワッ」

勇太が、嬉しい、楽しい、怖いをミックスジューズにしたような悲鳴を上げた。

淳也は悲鳴を上げている勇太をデジタルカメラでパチリ。

「まあ、淳也さんたら。もうパパみたい」

かんなが嬉しそうに小さな声で呟いた。

日曜日のせいか、UMJ内は、どこも人で混雑していた。

何度かUMJに来た事のある淳也は、地図を片手に勇太が喜びそうなハリウッド・ジェットコースター、スパイダーXに二人を案内した。

どちらも超満員。

「ジェットコースターに乗りたい。ジェットコースターに乗りたい」
駄々をこねる勇太をなだめて、淳也は次にジェラシックワールドへ。
そこも満員ではあったが、前よりはずっと増しだった。

「よし、ここで待とう」

「面白そうね」

「やったあ」

勇太もかななも嬉しくてはしゃいでいる。

30分ほど並んで、3人はいよいよ館内へ。

3人は並んでボートの先頭に乗った。

「恐竜が出て来るから、勇太くん、気を付けろよ」

「ママ、恐竜が襲ってくるん」

「そうよ。怖いわよ」

「あつ、出た！」

淳也がふざけて叫んだ。

「ぎゃあああああゝ」

勇太がボートが動く前から悲鳴を上げた。
ボートが動き出した。

熱帯雨林を探検するボート。

大地をのっしのっしと歩く恐竜。

水の中から恐ろしい顔を現す恐竜。

いろんな恐竜が登場するたびに勇太は、

「出た！」

「わおゝ」

と、驚き、喜んで、歓声を上げている。

恐怖と興奮が続く、手に汗握る冒険。

ボートはクライマックスへと進んで行く。

突然、体長8メートルの最大の恐竜が3人を襲う。

「わあうゝ」

その瞬間、暗闇の中を26メートルの高さからまっさかさまに川底へ。

「ぎゃあああああ〜」

「ギャツギャアーーーーー」

かなは勇太に負けないすごい叫び声を上げた。

水しぶきの中をボートは川に下って行った。

「すごい迫力ね」

「すごい、すごい、すごい！ママ、また乗せて」

勇太は髪をベチャベチャにしながら、興奮している。

「僕はかなさんの悲鳴がすごかったです」

「まあ、ご免なさい。だって、まっさかさまに落ちるんですもの」

「二人とも楽しめて良かったです」

「まあ、淳也さんたら」

3人は先ほどの驚きと興奮を語り合いながら、並んで歩き出した。

少し歩いてから、ベンチを見つけると、そこに3人は腰を掛けた。

「そろそろ昼にしましょうか」

かなと淳也は、近くの売店へ。

仲良く3人はピザを頬張った。

「どう」

「なかなかいけますよ、これっ」

「ママ、すっごいおいしかった」

「本当、おいしいわね」

「かなさん、僕はこれからハリウッド・ジェットコースターをひとりで待ちます」

「えっ、ひとりで待つ」

「ええ、勇太君がジェットコースターに乗りたがっていましたから」
「そんなの悪すぎるわ」

「1時間以上待たなければならぬと思います。」

その間、かなさんたちは好きなアトラクションを見ていて下さい」

「いいのかしら」

「そうして下さい」

「じゃ、甘えようかしら。勇太、ジェットコースターに乗れるわよ」

「わーい。やった」

「淳也さん、ありがとう」

「いいえ」

「ママ、アイスクリームが食べたい」

かなは勇太に1000円札を渡した。

「私たちはここに座っているから、アイスクリームを買ったら、すぐに帰って来るのよ」

「はい」

かなは

「かなさんの家族になれたらいいな」

と言う言葉の真意を確認するのは、今しかないと思った。

「淳也さんひとつ聞いてもいい」

「どうぞ」

「先日、淳也さんは、

かなさんの家族になれたらいいな

と、言ったわね」

「ええ、言いましたけど」

「あれは、どういう意味なの」

「どういう意味って」

「願望なの？それとも現実なの？」

淳也はかなの顔を覗き込んだ。

「もちろん、現実です」

「願望じゃ、ないのね」

「ええ、現実です」

「と言う事は、あれをプロポーズと受け取ってもいいの？」

「そう、受け取って下さい」

「本当に、受け取っていいの？」

「本当に、本当です。わかりにくいなら、はっきりと言います」
「・・・」

「 kannさん、僕と結婚して下さい。
勇太君のパパにならせて下さい」

「 淳也さん・・・うううっ・・・」

kannは涙を流した。嬉しくて嬉しくて涙が止まらなかった。

「 本当に、こんな子持ちでいいの」

「 子持ちでいいです」

「 淳也さん、初婚なんでしょう。後で、後悔しない？」

「 後悔なんか、絶対にしません」

「 淳也さ〜ん。うううううううっ」

kannは人目も気にせず、わあわあ泣きながら淳也の胸に飛び込んだ。
だ。

「 ううん、うんうん、ううううっ」

kannは淳也の胸で、涙をポロポロ流して泣いている。

淳也はkannを思い切り抱き締めた。

「 どうして私なの？」

「 お袋が糞尿だらけの時、 kannさんの介護の仕方を見て、
結婚するならこの人だと、直感しました」

「 それなら、吉見さんにお礼を言わなくちゃ。

そして、もっと、便を垂れ流してと頼もうかしら」

「 それだけは、勘弁して下さい」

「 まあ、淳也さんたら」

「じゃ、かなさんはどうして僕を」

「前の亭主は暴力で泣かされたわ。だから、男の人は怖くって。

もう、結婚なんかするものかと思っていたの」

「それが、なぜ？」

「吉見さんの介護を手伝う淳也さんを見て、男の人にもこんな優しい人がいるんだって。

この人ならやっていけるかなと思ったの」

「ウンチが取り持つ縁か」

「ウン！」

「えっ、かなさんってそんなだじややれを言っんですか」

「ウン！、吉見さん、びっくりするわよ」

「お袋、ウンと喜びますよ」

「まあ、淳也さんたら」

「ところで、勇太君は遅いですね」

「いけない。私話に夢中になっていて、勇太の事を忘れていたわ。本当、勇太遅いわね」

「迷子でもなったのかな」

「えっ、迷子。どうしよう。捜さなくちゃ」

「僕も捜します」

二人は勇太を必死になって捜し出した。

「トイレにもいませんね」

シヨップやレストランの中にも入って調べたが、勇太はいなかった。

「勇太〜。勇太〜。勇太〜」

「勇太く〜ん。勇太く〜ん。勇太く〜ん」

二人は1時間位捜したが、勇太は見つからなかった。

「広すぎて捜せないな」

その時、UMJの制服を着たクルー（スタッフ）が歩いているのが見えた。

淳也は走って行って、クルーを引き止めた。

「かながクルーに尋ねた。」

「迷子なんですが」

クルーは手帳を持って、かなに質問した。

「お子さんのお名前は？」

「綾瀬勇太です」

「年齢は？」

「5歳です」

「身長と体重は？」

「110センチ、20キロ位です」

「勇太君の髪型は」

「普通のぼっちゃん刈りです。前髪は揃えていませんが」
「わかりました」

「ほかに何か、特徴はありますか」

「別に無いです」

「今日の服装は？」

「ブルーのジーンズに黄色のポロシャツです」

「自分の名前は言えますか」

「はい、言えます」

「お母さんの名前と携帯の電話番号を教えてください」

「綾瀬かな」

携帯は 090 です」

「少し待って下さいね」

いま、迷子センターに問い合わせしています」

「.」

「申し訳ありません」

いま、迷子センターには、勇太君らしい子供は保護されていないようです」

「今から専門のクルーに連絡して、勇太君を捜すように手配します」
「迷子センターで待たれます。それとも、携帯に連絡します」

かなは淳也の顔を見てから

「携帯にお願いします」

と、言った。

「では、迷子センターの電話番号を覚えておきます」

「06・・・です」

「それからお母さんの写真を撮らせてもらえますか。

確認の為に勇太君に見てもらいますので」

「わかりました」

「もし、お母さんが勇太君を見つけられた場合は、迷子センターに電話を入れてもらえますか」

「はい、そうします」

「では、お母さんの写真を撮らせて頂きます」

クルーは携帯電話でかなの写真を撮影した。

「これで、失礼します」

「よろしく願います」

クルーは頭を下げて立ち去った。

「淳也さん、これからどうする？」

「今まで1時間位捜してもいなかったですよね。

今度は食事をした所から、ジェラシックワールドの方へ、

戻って見たらと思うのですが」

「そう言えば、ずっと進行して来たよね。そうしましょうか」

「じゃ、そうしてみましよう」

二人は食事をした所まで早足で戻った。

その間も、かなは左右をきよろきよろと眺め回して、勇太を捜していた。

（もしかすると、ジェラシックワールドの辺りにいるかしれない）

淳也はそんな勘がしてなかった。

淳也の勘は当たっていた。

勇太はジェラシックワールドの辺りで、ベソをかいて泣いていた。

「あつ、勇太君！！やっぱり俺の勘は当たっていたな」

「あつ、本当、勇太だわ。勇太〜。勇太〜」

「あつ、ママだ。うわあうわあうわあうううっ」

勇太はかなと淳也を見つけると、安心したのか、今まで以上にわあわあと泣き出した。

「勇太、見つかって良かったね。ママ、心配したんだから。ウツウウウツ・・・」

かなは勇太を抱き締めて、涙を次から次に流している。

「勇太君、良かったな」

淳也は勇太の頭を撫でた。

「うん。ひいっく、うっく、うっく、うっく・・・」

「良かった。良かった」

「勇太、淳也さんがいたから見つける事が出来たのよ。」

お礼を言いなさい」

「おっちゃん、ううう、ありがとう、
うつく、うつく、うつく・・・」

「よし。勇太君、男なら泣くのはやめろ。
その代わり、おじさんが肩車をしてやろう」

「ほんと。もう、泣けへん。わあゝい」

「勇太、良かったわね」

「僕、おっちゃん、大好きや」

「勇太君、おじさんがしゃがむからこの上に乗るんだよ」

「やったあゝ」

「よし。立ち上がるぞ」

「わあっ」

「怖くないか」

「すげえ。すげえ、高いなあ。おっちゃん、僕、怖ないで」

「勇太、大丈夫？」

「大丈夫や」

「 kannasさん、迷子センターに電話をして下さい」

「そうそう、電話しなくっちゃ」

「 kannasは迷子センターに携帯で電話をしている。」

「わあゝい。わあゝい」

「勇太は肩車に乗って、はしゃいでいる。」

「僕、おっちゃんが好きや」

「そうか。おじさんも勇太君が好きだ」

「おっちゃん、頼みがあるねん」

「何がして欲しいのだ」

「おっちゃん、僕のお父ちゃんになってくれへん」

勇太はこれまで、お母さんをママ、お父さんをお父ちゃんと呼んでいた。

「よし、おじさんが勇太君のお父ちゃんになってやる」

「ほんまやで」

「本当だ。男の約束だ」

「やった〜。わあ〜い。わあ〜い。わあ〜い」

「勇太。どうしたの。何か、いい事でもあったの」

電話を終えたかんなが、勇太に尋ねた。

「おっちゃんと男の約束をしてん」

「何を約束したの」

「あんな〜。おっちゃんが僕のお父ちゃんになってくれるねん」

「まあ、勇太のお父ちゃんに」

「男の約束してん。ママ、嬉しいやろ。」

おっちゃん、ハンサムやもんな」

「まあ、勇太ったら。そうよ。」

おじさんが勇太のパパになってくれるのよ」

「パパやないで、お父ちゃんやで。嬉しいな。嬉しいな」

「勇太、良かったね。お父ちゃんが出来て」

3人はそれぞれの心の中で、ひと足早く家族になろうとしていた。

淳也は考えていた。

^

（かなさんの家族になる前に、今の仕事を清算しなければ）

先日、2つの仕事を続けて失敗した時にも、脳裏の片隅でそろそろ引け際かなと、淳也は思っていた。

かなさんとうなつた以上、今の仕事を続ける事は出来ない。
勇太君のためにも、お袋のためにも、今の仕事から離れる必要があるだろう。

（次の仕事で最後にしよう。

最後の仕事をバッチリ決め、花道を飾って、おさらばしよう）
淳也は決心が付いた。

並んで歩くかなを淳也は見た。

かなは幸せそうな優しい優しい顔をしていた。

7話 目撃

7話 目撃

パソコンの前に座りながら純一は、U M Jでの楽しいひと時を思い出していた。

（勇太君は迷子になったが、見つかって本当に良かった。
ジェットコースターに勇太君を乗せてやれなかったのが、少し心残りだ。

かななさんは僕がプロポーズをすると、泣きじゃくっていたな。
あの涙の為に、これで仕事は最後にしよう）

純一はそう決意すると、d u c k l i s tに目をやった。
D u c k l i s tには、現在、2羽の獲物が残っていた、

1羽は松原恵

年齢 52歳

身長 158センチ位

体重 52キロ位

職業 ホステス（南のキャバレー 花の国）
携帯電話 090

もう1羽は矢本薫

162センチ位

年齢31歳

体重 50キロ位

職業 クラブホステス（北新地クラブ LIP）

ナンバー2ホステス

携帯電話 090・・・

純一は2羽の獲物を比べてみた。
どちらも情報は不足している。

が、純一がいろんなホステスに聞き取りで調べ、身に着けている装飾品を見た限りでは、どちらも相当の金を持っている事は確かだろう。

畏にはめ易いのは、あきらかに52歳の松原恵である。

しかし、最後の仕事と言う事を考えれば、矢本薫に食指が動いた。

純一のプロ意識を満足させる最後の獲物は、畏にかけにくい獲物こそふさわしかった。

純一は薫に、最後の獲物としての狙いを定めた。

『LIP』は船大工通りの全空ホテルのすぐ近くにあるクラブ。

そこは、ボックス席が40席位あり、クラブホステスが12人ほどいた。

そのクラブホステスのひとり薫と純一は、同伴で全空ホテルの5階にある日本料理『雲上』で夕食をしていた。

先付けに続いて造りが出て来た。

その時、純一は和服で決めている薫に、脱いだ後を考えて「着付けは自分で出来るのですか」

と、聞こうと思っていた。
その前に、薫が口を開いた。

「私芝ちゃんに頼みがあるんやけど、聞いてもらえるかな」
「えっ、頼みって、何ですか」

「うちのお客さんでは、芝ちゃんしか出来ない内緒の頼み。
引き受けて欲しんやけど」

「僕にしか出来ない内緒の頼みって、いったい何ですか」

「私のライバルをメロメロにして欲しんやけど」
「ライバルをメロメロに」

「そう。仕事が出来ない位にしたらえば、それで結構よ。
芝ちゃんなら簡単でしょう」

「ライバルって、ナンバー１のリサさんですか」

「よくわかったわね」
「それは、簡単じゃないですよ」

「どうして、ほかのお客さんならそうかもしれないわ。
でも、芝ちゃんなら、たやすいと思うけど」

「リサさんはまだ若いし、お客さんからもてじゃないですか。
とても、無理ですよ」

「私もこの世界でただ飯を食ってる訳じゃないのよ。
男を見る目は持っているつもりよ。芝ちゃんはただの男じゃないわ」

「ただの男じゃない？」
「そうよ。」

芝ちゃんは女を惹きつけるフェロモンがたっぷりと
出てるじゃないの」

「そうですかね」

「そうよ。」

芝ちゃんなら金がすべての女は別にして、大概の女はイチコロよ」

「それは、いかぶりですよ」

「芝ちゃんなら出来るわよ。」

その代わりお礼はたっぷりとさせてもらうつもりだけど」

「お礼？」

「ええ、ここに200万円があるわ。これは前金よ」

薫はテーブルの上に帯封のある100万円札をポンと2つ置いた。

「うまく行けば、成功報酬としてあと300万円をあげるつもりよ。」

悪い話じゃないでしょう」

「悪い話ではないが・・・」

（全く、思っても見ない方向に物事が動く。

最近、自分のシナリオ通りに物事が運ばない。どうする？
流れに自然に身を任せるか。

それとも、この話には乗らず、これで仕事を最後とするか）

「どうするの」

「・・・と、やらしてもらうつよ。」

要は、薫さんがナンバー1に復帰できれば言い訳だろう」

「そうよ。リサを潰すためには、一番の劇薬は男なの。」

リサをメロメロにさせて仕事に付かないようにさせる事が出来

る飛び切りのいい男じゃないとね」

「そんな自信は無いけれど、やらせてもらうよ。その代わり、方法は俺に任せてもらうからな」

「ええいいわよ。芝ちゃんに任せるわ」

話がまとまると、純一は前金の200万円を上着の内ポケットにしまった。

薫は話がうまく運ぶと、八寸、紙鍋、ちらし寿司、シャーベットをぺろりとたいらげた。

「いい事教えて上げようか」

「何ですか」

「芝ちゃんが私を指名するじゃない。」

「芝ちゃんを見るリサの目は凄いのよ」

「リサさんはどんな目をしていましたか」

「あれは嫉妬に狂った目よ」

「信じられないな」

「リサは芝ちゃんに気があるかもよ。」

「ねえ、意外と簡単な仕事でしょう」

「薫さんにはまいったなあ。」

「うまい事言って、」

あとで僕を笑い者にしようと思っているんでしょ」

「そうかもね」

二人は顔を見合わせて笑った。

純一はシナリオの変更で頭を抱えていた。

青山リサ。25歳。

クラブ『RIP』では、5年間位、薫が店のナンバー1だった。最近、この座をリサが奪い、薫はナンバー2の座に追われ、女のプライドをズタズタにされていた。

25歳で店のトップに立ったりリサは、今や飛ぶ鳥を落とす勢いがあった。

落ち目な女ほど落としやすいが、上がり目の女は攻めにくい。

純一は難攻不落の城を落とす軍師のように、相手の弱い部分を捜していた。

「嫉妬」

純一は薫の話を聞いていて、この言葉をキーワードにして、シナリオを組み立てようと思っていた。

同伴で薫と一緒に『RLP』に行くと、純一はマネージャーにチップを渡した。

そして、来週の月曜から3日間連続で、リサの同伴の予約を依頼した。

マネージャーはリサの都合を聞き、月曜、火曜の2日間の予約を取る事が出来た。

クラブの常連さんが同伴には使わないコース。

普通の若いカップルのデートコース。

2つの観点から、月曜日、純一は西梅田で待ち合わせをし、近くにある桜橋ボーリングで同伴、いやデートをした。

リサには電話で普段着を用意する事を、純一はあらかじめ連絡しておいた。

「同伴でボーリングするなんて、初めてよ」

リサは呆れていたが、ボーリングをするほどにはしゃぎ、終わり際には普通の女の子に戻っていた。

ぎりぎりまでボーリングをしていたので、マクドナルドでハンバーグを頬張ると、二人は急いで『RIP』に駆け込んだ。

「恋人とデートしたみたい。今日は超楽しかったわ。ありがとう」

リサは熱い目で純一に礼を言った。

火曜日は昨日より1時間早い3時に、新阪央ホテルのロビーで二人は待ち合わせをした。

目が覚めるような真っ赤なドレスをきたリサが現れた。

グレンチェックのスーツでパリッときめる純一が、リサを見て手をさっと上に上げた。

「昨日はありが・・・」

リサがお礼を全部言い終える前に、

「好きだよ」

と言って、純一がリサの口をふさいだ。

群集が行き交うホテルのロビーでの突然のキスシーン。
映画の撮影現場かと錯覚する余りにも美しいキスシーン。

群集は息の吞んで見詰めていた。

その中に、かんなの前の夫の前崎がいた。

前崎は携帯電話を取り出すと、純一の顔がわかるような角度で素早く撮影をした。

「シャララーン」

「シャララーン」

「シャララーン」

さらに、角度を変えて前崎が撮影をする。

「シャララーン」

「シャララーン」

純一は長い口付けが終わると、リサの耳元に向かって囁いた。

「苦しいほど、愛している」

「私もよ」

リサも純一の目を見詰めながら呟いた。

「2人きりになろう」

「ええ」

純一はフロントで部屋を手配した。

前崎はフロントに並ぶ二人を携帯でわからないように撮影している。

「シャララーン」

「はやく振り向け」

「よし！」

「シャララーン」

2人はエレベータに乗り込んだ。

前崎はどうしようかと迷ったが、エレベーターがどの階で止まるかを見定める事にした。

エレベータは5階、7階、8階で止まった。

前崎は次のエレベーターで5階、7階、8階で降り、辺りの部屋を見渡したが、2人がどの部屋に入ったかわからなかった。

ふたりは803号室にいた。

純一はリサをとろけさせていた。

8話 青酸カリ

8話 青酸カリ

リサは同伴以来、純一を特別な目で見ていた。
今まで同伴と言え、おじん、でぶ、禿げばかり。

（うぜえ〜んだよ）

いつもリサは心の中でそう思っていた。

いくら、一流のレストランで最高級のおいしい物を食べても、お金の為でも、相手がこれではと、うんざりとしていた。

そこへ、気になっていた純一と夢のような同伴。

ボーリングが、マクドナルドのハンバーグが、取立ての野菜のように、みずみずしく新鮮だった。

リサは純一と男と女の関係になった時、『RIP』でのナンバー1の地位やお金はどうでも良く、純一との結婚を夢見るようになっていた。

リサはナンバー1クラブホステスでは無く、普通の幸せを求める普通の女の子になっていた。

（純一は自分の愛を、きつと感激して受け止めてくれるだろう）
リサはそう確信していた。

しかし、純一の反応は全く違っていた。

あくる日から、純一は事もあるうちに、薫と同伴を始め出した。
リサは信じられなかった。

気が狂いそうになるほど、リサは薫に嫉妬をした。

（あんなポンコツ女のどこがいいのよ。おばんじゃんか）

リサは純一を激しく恨んだ。

次の日も純一は薫と同伴で『RIP』に現れた。

二人を見たとき、リサはブランデーグラスを床に叩き付けた。

「畜生！」

「パリ〜ン」

リサのプライドがワイングラスのように粉々に砕けた。

次の日、リサは『LIP』の前で、薫を待っていた。
その日、薫はひとりだった。

リサが鬼のような顔で、薫に声を掛けた。

「人の男に手え出さんとして」

「人の男って誰の事や」

「芝ちゃんに決まってるやろ」

「芝ちゃんがあんたの男やて。ふん、笑わせないでよ」

「何を」

「芝ちゃんはもともとうちの客や。盗んだのはあんたやろ」

「うるせえんだよ。おばんが何ほざいてんだよ。

今は俺の男だから手を出すなと言ってんだろ。

てめえは、引っ込んでろ」

「ふざけるな。あんたの男だって。何を血迷った事を抜かしやがる。芝ちゃんはずちの男や。あんたこそ、手を引きよし」

「うるせえ、ざけんな」

バチン。

リサが薫の頬を思い切り平手でぶった。

「やりやがったな」

バツーン。

今度は薫がリサの頬つぺたを思い切り叩き返した。

「何を」

リサが薫の和服の襟ぐりをぐつと掴んだ。

「何さらすんや」

薫がリサのドレスを鷲掴みにした。

二人は『RIP』からすぐ近くの船大工通りの真ん中で、派手に取

っ組み合いを始めた。

野次馬がみるみる二人を囲んだ。

「ええぞ！」

「もつと、やれ」

「ピュ〜」

野次馬が野次と歓声を上げる。

「やりやがったな」

「くたばりやがれ」

リサが薫の馬乗りになり、薫の首を締め上げる。

「苦しい」

「殺したる」

「うつっ」

その時、チーフの藤村がリサの手を振りほどいた。

「あほんだら。やめんかい」

藤村はリサの両脇を抱えて力付くで立ち上がらせた。

リサはハアハアと荒い息遣いをしている。

薫は死んだように目を瞑って寝たままである。

「薫さん、薫さん」

藤村が薫の体を揺すった。

「薫さん」

薫がぱちんと目を開けた。

「大丈夫や。ああ、苦しかった。死ぬかと思ったわ。

あのあまゝほんとにうちを殺す気やったわ。危ないところや」

リサは物凄い形相で仁王立ちをしている。

「今度、手を出してみい、今度はほんとに殺してやる」

「殺せるもんやったら、殺してみい」

「二人ともやめんかい。しゃあない奴っちゃな」

二人は猛獣のような目をして睨み合っている。

「やめんかい、言ったらやめんかい」

「あいつが悪いのや」

「てめえだろ」

藤村は何とか2人をおとなしくさせると、野次馬を解散させた。

二人はぶつぶつ言いながら、クラブの中に入った。

藤村は二人をテーブルに座らせ、こっぴどく叱り付けた。

あれ以来、リサは同伴を断るようになった。

『RIP』のノルマは、同伴が週に3回。

幾らマネージャが説得しても

「暫くは、同伴はしたないんや」

と、リサはてこでも断り続けた。

そんなある日、薫が結婚すると言う噂が流れた。

結婚の噂を流したのは、薫自身だった。

純一は薫と2日続けて同伴をして以来、『RIP』には顔を見せなかった。

リサのその後の状況については、薫から電話で聞いていた。

その時、薫に

「結婚すると噂を流してくれ」

と、純一が指示を与えていたのだ。

リサは、薫が結婚すると言う噂を店の子を通じて耳にした時、怒りと嫉妬で体中がぶるぶると震えた。

（薫のあほんだら、今度こそ殺してやる）

（芝ちゃんに逢って真意を確かめたい

なぜ、逢いに来てくれないの。なぜ？なぜ？なぜ？）

リサは純一に逢いたくて逢いたくてたまらなかった。

が、純一は『RIP』には姿を見せなかった。

純一の連絡方法もわからなかった。

リサは苦しくて苦しくて悶えていた。

苦しさを逃れるために、リサはアルコールに助けを求めた。

リサは酒を無茶飲みしては、酔ってふらふらになり、客に悪態を付いた。

「うるせえんだよ」

「ケツを触るな。このくそつたれ」

「ざけんな。きもいんだよ。禿げじじい」

余りの悪態と同伴の拒絶で、リサの売り上げは大幅にダウンした。ナンバー１の座から、リサは飲んだくれ、荒れに荒れ、お荷物に成り下がった。

「俺のどこが悪いんだよ。てめえ、ふざけるんじゃないよ」

リサはチーフの藤村の注意にも従わなくなった。

元の状態への復帰を願い、我慢に我慢を重ねていた『RIP』のママは、ついにリサを首にした。

「辞めてやろうじゃないか」

捨て台詞を残してリサは、『RIP』を辞めて行った。

純一は同伴の入っていない日に、薫と喫茶店で待ち合わせをした。

「お疲れさん、芝ちゃん。さすがやねえ」

「無事、ナンバー１には復帰出来ましたか」

「芝ちゃんのお陰で、無事、栄光の座に返り咲く事が出来たわ。ありがとう」

「それは、良かったです」

「あつ、忘れん内に約束の300万円渡しとくわ」
薫は300万円が入った茶封筒をテーブルに置いた。

純一は封筒の中に目を移した。中には、100万円の束が3つ入っている。

「確かに」

その時、ウエイトレスがコーヒーを2つテーブルの上に置いた。
コーヒーの香ばしい香りがプーンと漂った。

コーヒーを飲みながら、薫が口を開いた。

「私が睨んだ通りやったなあ。いや、それ以上かもわからへん」
「いや、それほどでも」

「芝ちゃんは劇薬になるやろとは思っていたけど、想像以上の効き方や。びっくりしたわ」
「何がです」

「リサをメロメロにしてとは頼んだけど、息の根を止めるとは思ってもみなかったわ」
「息の根を止める？」

「リサはアル中になり、お払い箱や。そやけど、たいしたもんやなあ」
「辞めたんですか」

「あつ、芝ちゃんに言つてなかったかなあ。

リサは首やで。ええ気味やわあ」

「リサさんに、少し悪かったかな」

「ええんよ。リサは嫉妬で私を殺そうとしたんよ。

あんな性悪女、辞めてせいせいしたわ」

「僕は後味が少し悪いな」

「芝ちゃん、凄い効き目やったけど、どんな手を使ったの」

「それは、企業秘密だ」

「芝ちゃんは劇薬でも、青酸カリやな」

「そう言う薫さんも、

ライバルをひと噛みで殺すまむしやないですか」

「青酸カリとまむしか。

毒は毒を持つて制すと言うから、

芝ちゃん、私と結婚するっていうのはどう？」

「それは、遠慮さしてもらいます」

「結婚して欲しいと言う男は幾らでもいるのに、
気に入った男は遠慮するか。

世の中はままにはならんなあ」

「栄光の座に返り咲いたのですから、

もうひと花咲かすと言うのはどうですか」

「それもそうやな」

二人はにこやかに談笑し、そして別れた。

（終わった！

花道を飾るとまでは行かないが、すれすれ合格点で無事最後の仕事を終える事が出来た。

これで、きつぱりとこの仕事から足を洗おう。

警察のやつかいにならなくて、本当に良かった。

これからは、何か堅気の仕事を探そう）

純一はそれなりの充実感を噛み締めながら、マンションへと足を急がせていた。

途中、純一は１００円硬貨を上に取り上げ、それを右手で左手の上に乗せた。

コインは裏を指していた。

9話 復縁

9話 復縁

かななの前の夫の前崎は携帯電話の液晶画面を見ながら、にんまりと微笑んでいた。

「しかし、よう、撮れてるなあ」

次の画面を見ては、

「あの意気地なしめ、吠え面をかかせたるから、それまで待つとけ」と、前崎はひとりでにたと笑っていた。

「二人が部屋に入る決定的瞬間を撮れんかったのは、ほんま残念やったなあ」

「でも、これだけ証拠写真があれば大丈夫や」

「そやけど、相手の女はええ女やな」

「これでまたかななを俺の女にできる。よっしゃあ」

「かなな、次のお前の休みには行くから、楽しみにしとき」

「ああ、ぞくぞくするやんけ」

前崎は独り言をぶつぶつ言っでは、ひとりでけたけたと笑っていた。

純一はパソコンの前に座り、d u c k l i s tを開いていた。

「これまでも随分と世話になったが、これでおさらばだ」

そう呟くと、純一はd u c k l i s tをすべて消滅した。

（警察沙汰にならずに、足を洗える事が出来るのは、
本当にラッキーだった）

純一は今までの数々の仕事を振り返っていた。

「俺もこれまで随分と危ない橋を渡って来たもんだ」

「しかし、不思議と警察には縁が無かった。」

これも欲を出さなかったお陰かな」

「女たちは達者で暮らしているだろうか」

「リサはアル中で『R I P』を首になったらしい。

少しやり過ぎたかな。悪かったな、勘弁しろよ」

「勝手かもわからないが、みんな幸せに暮らして欲しい」

純一は心の中で女たちに頭を下げた。

ジョッキの中には100円硬貨が半分位入っている。

（もう使う事もないだろう。

勇太君にでも小遣いにプレゼントしようか）

純一はマンションをいつでも引き払えるように、てきぱきと後片付けをした。

「よし、これでいいか」

「堅気の仕事を探そうと思う。

苦勞を掛けると思うが、きっと幸せにしてみせる」

かんなの顔を思い描き、純一が力強く呟いた。

実家への帰り支度を済ませると、純一は阪急梅田駅に向かった。

「ママ、遊びに行ってもええ」

勇太がかんなに元気良く声を掛けた。

「すぐに帰って来るのよ」

かんなが勇太を目で追いながら答えた。

「はい」

ギョードン。

勇太がドアを閉めて出て行った。

勇太が出て行くと、シーンと部屋の中が静まり返った。

今日は久しぶりの休日。

かんなは朝から、朝食の後片付け、掃除、洗濯と大忙しだった。

洗濯物をベランダに干し終わってほっとしていると、チャイムが鳴った。

ピンポーン、ピンポーン。

誰かなと、かんなが玄関の扉を開けると、前の夫の前崎が玄関ににやにやした顔をして立っていた。

「久し振りやな」

「何の用。用が無いのやったら帰って」

「ええ話や」

前崎はにたつにたつと嫌な笑いを続けている。

「何やの。にたにたと笑って、気持ちが悪いわ。用があるのやったらさっさと言うて」
「びつくりするで」

「何やがの」

「腰抜かしたらあかんで」

「早く言いな。言わんつもりなら、帰って」
「わかった。わかった。見せたるわ。」
「ここではなんやから、中にいれてくれや」

「いやや。そこで見せたらええやないの」
「じゃあないな。ほんなら一枚だけ見せたるわ」

前崎はスラックスのポケットから携帯電話を取り出すと、液晶の画面に一つの映像を映し出した。

それは、淳也とリサがホテルのロビーでキスしている写真だった。

「この写真はプリントしてあるからお前にやるわ」

前崎は上着の内ポケットから写真を取り出し、かんなに手渡した。

かんなはその写真を見て、あつと驚いた。

「嘘や。信じられへん。淳也さんによく似ているけど、別の人や」

「あほか。よう見てみいや。正真正銘にあの男やんか。
お前、目が悪いんか」

「私は、絶対に信じへん」

「そない言つたかて、俺が新阪央ホテルで、ぎよつと驚いたから、
思わず写真に撮影したんやないか」

「嘘や。合成かもわからへんし」

「別の写真を見たら、嘘か、本当か、合成か、違つか、すぐわかるわ」

「そしたら、見せてみいな」

「見たいのやったら、中にいれてからやな」

「そんならええわ。うち、信じてるから」

「そうか。そんなら、さいなら」

前崎は帰る振りをして歩きかけた。

「待つて！すぐに帰ると約束してくれるか」

「ああ、なんぼでも約束したるわ」

かななは渋々前崎を中に入れた。

「邪魔するで」

前崎が含み笑いをしながら、中に入った。

「あんた、そこでええやろ」

かななが玄関先で話をもっていたのに、前崎はズカズカとリビングまで入って行った。

（まあ、仕方ないか）

かなはリビングに入る前崎の後姿を見ながら溜息を付いた。

「すぐに帰ってや。あつ、そこに座って」
「わかってると言ったやろ」

前崎は食卓テーブルに腰を下ろした。

かなは向かい側に腰を掛けた。

「写真を見るだけやで。見たら帰ってや」
「わかってるやんけ」

「そんなら、見せて」
「よし、見せたるわ」

前崎はロビーで撮った他の写真をかなに見せた。

「淳也さんみたいやし、そうやないみたいや。ようわからんわ」
「相手の女は凄い美人やで。お前より年もずっと若いしな」

「そうみたいやな」
かなは食い入るようにして液晶の画面を見ている。

「次の写真を見たら、あの男の顔も、
超美人の女の顔もはつきりわかるわ」
前崎はホテルのフロントから、こちらに振り返った二人の写真をかなににたにた笑いながら見せた。

かなはその写真に目が釘付けになった。

「間違いないわ。淳也さんだわ。信じられない！」
「どや、間違いないやろ。隣の女を見てみるや。」

男が振るい付きたくなるようなええ女や。

しかも、若おて、ぷりぷりや。俺かて羨ましいわ」

かななは呆然としていた。

思考力も無くしていた。

前崎はかななの表情を見て、ぬつと立ち上がった。
かななの肩に腕を回すと、いきなり口付けをした。

「何をするの。やめて！」

「あいつかて、ええ女とええ事やつとるやないか。
俺らも負けんようにやるうやないか」

「やめて〜言うたら、やめて」

前崎はかななを力付くで床に押し倒した。

「やめんと人に言うて」

「なんぼでも言うたらええ。ええとこ見せたるわ」

「警察を呼ぶから」

「呼んでみい。観衆が多いほど興奮するわ」

「誰か来て〜」

「来るかあ。俺らは夫婦やで。夫婦が何して何が悪いのや」

「夫婦やない。頼むからやめて」

前崎は足をバタバタさせているかななのスカートに手を入れ、下着

を膝まで落とした。

「また、夫婦になる」

「いややあゝ」

そこへ、勇太が帰って来た。

「ただいまゝ ママ、帰ったよ。 あっ、お父ちゃん、何してんの」

「勇太。助けてゝ」

勇太はかなの声を聞いて、咄嗟に手に持っている野球のバットで前崎の尻を思い切り叩いた。

バスーン。

「いたっ、何すんねん」

バスーン。

「あほ！ やめんかい」

「どけ、どかんと叩くぞ」

勇太は前崎の頭を目掛けてバットを構えている。

「わかった。わかった」

かなは前崎がひるむ隙に素早く立ち上がった。

そして、台所にある出刃包丁を、かなは力強く握り締めた。

「早く帰って。そやないと、警察に強姦罪で訴えるで」

「お父ちゃんのあほ」

「あほんだらはお前やないか。」

もう、ちよつとの時に帰ってきやがって」

「早く帰りいな」

「わかった。」

わかった。今日は邪魔が入ったから、これで帰るわ。

そやけど、あの写真は作りもんやないで。

嘘や思たら、あいつに聞いてみ」

「帰って。あんたの顔なんか見たないわ」

「わかったわ。そやけど、あの女はええ女やったなあ。

俺かてあんな女やつたら欲しいわ」

「勝手にしたらええやんか。早く帰って」

「お父ちゃんなんか大嫌いや。はよ、帰れ」

「帰れ言ったら、帰れ」

「お父ちゃんなんか、帰れ」

「今から、帰るとこや。」

そやけど、あの女はええ女やったなあ」

前崎はやつとの事で帰って行った。

「勇太、ありがとう」

かなは勇太を抱き締めて、わんわんと涙を流した。
泣いても泣いても、次から次に涙が流れた。

「信じていたのに」

かなは淳也の裏切りを許せなかった。

「ママ、お父ちゃんが今度来たら、

僕がバットで頭を叩いたるから、泣くのはやめて」

「勇太。ありがとう。違うのよ。違うのよ」

かなはなおも泣き続けた。

悔しくて、悔しくて、かなは涙を流し続けた。

「ママ、僕が守ったるから、泣かんとって」

「ありがとう、勇太。うううううううううううううううう」

川を氾濫した濁流のように、かなの涙は激しく激しく頬を伝って
滴り落ちた。

10話 壁

10話 壁

「ただいま」

淳也は実家に帰ると、真っ先に母親のたえの部屋を覗いた。

「今、帰りました」

「おかえり」

「お帰り、兄さん」

兄弟喧嘩をして以来、妹の智子は母親の面倒をよく見るようになった。

「智子、ありがとう。お袋の面倒を見てもらって感謝しているよ。余り、無理はするなよ」

「智子が よう してくれて なあ。
有 難 てえ て、有 難 てえ て」

「まあ、お母さんたら、娘なら当たり前の事よ。
兄さんだつて、そんなに気を使わなくていいのに」

「今日は、綾瀬です」

「あら、綾瀬さんだわ。どうぞ」

「こんにち・・・あつ、淳也さん」

淳也を見るなり、かんなの表情が急に険しくなった。

「 kannanさん、お久しぶりです。今、帰って着ました」
「 そう・・・ 吉見さんどう」

kannanは淳也と目を合わせようとはしない。

「 kannanさん、顔 色 が わ る い けど、
ど な い し た ん」

「 吉見さん、大丈夫よ」

「 綾瀬さん、風邪でも引いたの」
「 いいえ、大丈夫です」

「 kannanさん、疲れが出たのじゃないですか」
「・・・」

淳也の言葉をkannanは無視している。

「 あら、何かあったの」
「 いいえ、別に」

kannanは介護の仕事をてきぱきと片付けると、さっさと帰り支度をして、急いで玄関へ。

「 今日の綾瀬さん、何か変よね。愛想がなくて、少し機嫌が悪い
みたいよ。あなた達、喧嘩でもしたの」
「 別に」

純一も同感だったので、kannanを追って玄関へ。
kannanは淳也を玄関で待っていた。

「吉見さん、少し話があるのでけど」

「吉見さんですか・・・ええ、いいですよ」

「仕事が終わった5時半頃新林池公園に来られる」

「ええ、行きます。 kannaさん、何か怒っているのですか」

「自分の胸に手を当てて聞いてみたら。

じゃ、池公園の玄関で5時半ね」

（自分の胸に手をあてて聞けか。

いったい kannaさんは何を怒っているのだろうか）
首を傾げながら、淳也は kannaを見送っていた。

池公園で淳也は kannaを待っていた。

暫くすると、kannaが自転車で見れた。

「 kannaさん、僕、 kannaさんを怒らすような事、何かしました？」

「自分の胸に手を当てて聞いてみたら」

「自分の胸に手を当てても分からないのですが」

「・・・」

kannaは黙って東屋の方に向かって、急ぎ足で歩いている。

「もし、何かしたのだったら、許して下さい」

「・・・」

「もう、絶対に怒らせるような事はしませんから」

「吉見さん、黙って歩けないの」

「吉見さんは勘弁して下さい。」

何か、かなさんとの間に高い壁が出来たみたいで」

「壁を作ったのは吉見さんじゃないの」

「いったい、何が壁を作ったのですか」

二人は東屋に着いた。

かなは東屋の中の椅子に腰を下ろした。

「壁はこれよ」

かなはすぐ前で立っている淳也に写真を渡した。

それは、ホテルのロビーで淳也とリサがキスをしている一枚の写真だった。

「あつ！ まいったな。どうしてこれを」

「やっぱり、身に覚えがあるのね」

「誰からもらったのですか」

「前崎よ。」

わざわざその写真を見せるために、前崎は私の家に来たのよ。

そのために、私は前崎からレイプされそうになったのよ。

私が納得できるように説明して」

かなは目にいっぱい涙を溜めている。

「前の亭主があの場合にいたのか。」

誰か写真を撮っている者がいた事は感ずいていたが、それが前の亭主とは皮肉な事だな」

「どう言うことよ。隠さずに説明して」

かなはぼとぼと涙を零している。

「あれは仕事なんだ」

「女性とキスをしてお金を稼げる仕事があるの。
信じられない」

「信じられないかもわからない。でも、本当なのだ」

「私は理解ができないわ」

「写真の彼女はクラブのナンバー1のホステスで、ナンバー2の女性から彼女を潰すように頼まれたんだ」

「そんな仕事がこの地球上に存在するの。」

「たとえば、存在するとしても、どうしてその女性とキスをする必要があるの」

「男に夢中になれば、仕事が手に付かなくなる。」

「そのために仕方なくしたのだ」

「それって、女性を騙す事よね。結婚詐欺に近いんじゃない」

「じゃないけど、近いかも知れない」

「淳也さんて、そんな仕事をしていたの。」

「結婚してから、その仕事を続けるつもりだったの」

「恥ずかしいが、そんな仕事をしていた。」

「でも、これで最後にするつもりだった」

「でも、その仕事は私にプロポーズをした後でしたのでしょう」

「済まない。プロポーズをする前に約束をした仕事なので、ついついやってしまった。許してくれ」

「もし、私にプロポーズをしていなかったら、まだその仕事を続け

るつもりだったの」

「続けていただろう」

「どうして、今回の仕事で最後にしようと思ったの」

「 kannnaさん、勇太君を悲しませなくなかったからだ」

「私が信じられる根拠はあるの？」

「大阪のマンションを引き払うつもりだ。」

それに、堅気の仕事を探そうと思っている」

「どうしてそこまでするの」

「命より大切なものが見つかったからだ」

「 淳也さん、私本当に信じてもいいの」

「信じて下さい」

「 淳也さん・・・」

kannnaは立ち上がると、淳也を力いっぱい抱き締めた。
そして、淳也の胸の中でわあわあと泣き崩れた。

「 kannnaさん、

僕は結婚詐欺まがいの恥ずかしい仕事をしていました。
そして、女性を数多く騙して来ました」

「うううっ・・・」

「僕はこの仕事に恥ずかしい仕事だと言う事が、
 kannnaさんとめぐり逢うまで気が付かなかった。
 kannnaさんを大切にしたいと思った時、初めて気がつきました」

「ういつういつういつ・・・」

「 kannasan、本当に僕を許して下さい」

「 淳也さるん」

「 本当に、許して下さい」

「 ういつういつ、淳也さんは、ういつ、あの女性と、ういつ、あれから、ホテルに入ったの」

「 許して下さい。入りました」

「 あるん、わあるん、わあるん」

「 許して下さい」

「 ういつういつ、そして、最後まで行っただの」

「 いいえ、キスだけです」

「 どうして、二人っきりになりながら、キスだけなの」

「 kannasanを裏切りたくなかったからです。信じて下さい」
淳也は苦しい嘘を付いた。

「 キスだけなら、あのままロビーですればいいじゃない」

「 皆が集まって来て、見ていましたので」

「 呆れた」

「 許して下さい」

「 キスは淳也さんから」

「そうです」

「あんな人前で」

「仕事だからと割り切っていました」

「呆れた人ね」

「私、淳也さんがわからなくなってきた。

だって、淳也さんて二重人格者なの。

私の前で見せる顔と、裏で見せる顔が全然違うじゃないの」

「そうかも知れません。

いま、その裏の生活からは足を洗おうと思っています」

「本当に洗えるの？」

「命に代えて洗います」

「本当に本当」

「本当に本当です」

「じゃ、私と指きりできる」

「出来ます」

「破ったら、私死ぬわよ。それでも、出来る」

「出来ます」

二人は指切りをした。

「破ったら、死ぬからね」

「わかりました」

「本当に仕方の無い人ね」

かなは二人がホテルの中で、たとえ一線を越えていたとしても、今回だけは淳也を許そうと考えていた。

結婚詐欺まがいの仕事まで正直に白状した淳也に、自分への愛と誠実さを感じたからだ。

「かなさんは、前の亭主からレイプされそうになったと言っていました、本当ですか」

「ええ、本当よ。写真を見るための条件だったから、仕方なく家に入れたの。」

私が写真を見て呆然としていたものだから、前崎に押し倒されたの」「何も無かったですか」

「危ない所で勇太が帰ってきて、私を助けてくれたの」

「へえ、勇太君が」

「そうよ。勇太ったら、前崎のお尻をバットで思い切り叩いたのよ。凄いでしょう」

「勇太君が。見たかったな」

「私が見たいのは相手の女性よ。凄い美人なんですよ」

「まあ、そうかな」

「私よりずっと若いみたいだし。私は美人じゃないし、おばんよ。それでもいいの」

「美人でなくても、おばんでも、僕はかなさんがいいんです」

「まあ、淳也さんたら、憎らしい」

淳也はやつとの事で、綻びを繕うことが出来た。

（破ったら、死ぬからね）

かななが言ったこの言葉を、淳也は深く深く心に刻んだ。

11話 涙

11話 涙

淳也はかななどの約束どおりマンションを引き払った。

暫く、実家の近くのビジネスホテルに、淳也は寝泊りをしていた。

それを知ったかなが自分の家で暮らすようにしきりに勧めた。
それで、淳也はかなの言葉に甘える事にした。

淳也が旅行用のカバンを一つ持って、夕方かなの家へ。
淳也は大きな深呼吸をしてから、チャイムを押した。

ピンポン。

「はい、今開けます」

「・・・」

「あら、淳也さん、待っていたのよ。
あれっ、荷物は、それひとつだけ」

「古い生活は綺麗さっぱり捨て去って来ました。

このカバンだけです。約束ですから」

「まあ、淳也さんらしいわ」

「今日からお世話になります」

「こちらこそ。勇太、淳也さんよ」

「あつ、おっちゃん、こんばんは」

「勇太君、今晚は」

「今日から淳也さんが一緒に暮らすのよ」

「わあゝい、おっちゃんが一緒に暮らしてくれる。

わあゝい。わあゝい」

「勇太君、よろしくな」

「僕、おっちゃん大好きや」

「おじさんも同じだ」

「勇太、よかったね。おっちゃんと一緒に暮らせて」

3人は夕食を済ませ、淳也と勇太は一緒に風呂に入った。

勇太は四畳半の子供部屋で先に寝た。

かななが風呂から上がって来た。

淳也は食卓テーブルに座って、かななを待っていた。

かななは食卓テーブルに缶ビールを2本置いた。

「淳也さん、飲まない」

「いただきます」

プシュ。

プシュ。

「風呂上りのビールっておいしいわね」

「おいしいっすね」

「淳也さん、今日から同居、よろしくね」
「こちらも、よろしく」

「お願いがあるのだけど」
「なんでしょうか」

「私たちはまだ夫婦じゃないよね」
「そうですね」

「だから、夫婦生活は少し待って欲しいの」
「了解」

「私が淳也さんを真に信じられるようになるまで待って欲しいの」
「了解の了解です」

「私は一日も早くその日が来て欲しいの。わかるでしょう」
「わかります」

「その時になったら淳也さんの事を、
勇太にお父ちゃんと言わせるからね。
それまで、待っていてね」
「楽しみに待っています」

「頑張つてね。あつ、それから、
淳也さんはこの部屋に寝てもらえる」

「了解です」

「私たちはあつちの6畳と4畳半に寝ているわ」

「わかりました」

「それから、ここにあるものは好きにでもらっていいからね」
「ありがとうございます」

「何か、質問はな〜い？」

「食費は幾ら入れればいいですか」

「淳也さんの好きな額で結構よ」
「了解しました」

「じゃ、お休みなさい」
「お休みなさい」

かなと淳也の奇妙な同居生活が始まった。
淳也はふとんの中に潜った。

（大阪のマンションは処分する事ができた。
後は、堅気の仕事を探すだけだ。
俺に何ができる。

コンビニの店員か、清掃員か・・・）

淳也は中々眠りに就く事が出来なかった。
朝方近くになって、淳也はようやく眠りに就いた。

母親のたえが脳梗塞の発作をまた起こし、急死した。

淳也は葬式などで忙しい毎日を送っていた。
新しい仕事は、まだ探せないでいた。

前崎は二人の仲がどうなったか、気になっていた。
かんなに電話をした。

かんなはあの男と一緒に暮らしている。
私たちの事はもう構うなど、電話で話していた。

（畜生！ あれだけ証拠を見せたのに。
あいつらは別れるばかりか、一緒に暮らし始めやがった。
いったい、どうなってんねん。

しゃあない、こうなったら奥の手を使うしかないか）

そう心が決まると、前崎は車を運転して、京都へ向かった。

前崎はかんなの家の近くの道路脇に車を止めた。

「勇太の奴、出てけえへんな」

前崎はいらいしながら勇太を待っていた。

1時間ほど経った。

勇太がバットを持ってこちらに向かって歩いて来る。

「あいつ、またあのバットを持ってやがる」
「勇太」

「あつ、お父ちゃん、また来たな。こっちに来るな、また叩くぞ」

勇太はバットを両手で握り締めて身構えている。

「おいおい、やめんかい。」

今日は前の埋め合わせに、これっ持って来てやったやないか」

前崎は車の窓からサッカーボールを勇太に見せた。

「あつ、サッカーボールや」

「欲しいやろ」

「そんなもんいらんわい」

「ほらっ」

「あっ！」

サッカーボールは勇太の胸に当たった。

ころころころ〜。

ボールは道路に転がって行った。

勇太はボールを追っかけて歩道から車道に走り出した。

「勇太、止まれ、止まらんかい。危ない！あああつ！！！！！！」

「あつ、お父ちゃ……………」

対向車線の軽トラックが勇太をひいて走り去ってしまった。

「こらあつ！あほんだら！勇太をひき逃げしあがつて戻ってこんかい」

前崎は車を出て、軽トラックのナンバープレートを確認した。

メモをし、大急ぎで、前崎は携帯電話で救急車を呼んだ。その後、前崎は警察とかんなに電話を入れた。

「勇太、勇太、しっかりせえ、勇太・・・うつうつ・・・」

前崎はポトポトと涙を流した。
そして、事態の進展に震えていた。

前崎は救急車が来るまで、勇太泣きながらを見守っていた。
ピーポ、ピーポ、ピーポ・・・。

救急車は勇太と前崎を乗せて、近くの洛西医大付属病院へ。

勇太は全身を強く打撲し、病院に運ばれてすぐに死亡した。

「勇太・・・勇太・・・わあああああ・・・」

前崎は大声を上げて泣いた。

「うつうつ・・・」

「俺が悪いのや。堪忍してくれ」
前崎は後悔しながら泣き続けた。

かなは救急車に乗っている前崎から連絡を受けて、洛西医大付属病院に走って行った。

「勇太、死なないで。勇太、絶対に死ンじゃ嫌よ。勇太」

かなが病院に駆け付けた時には、もう遅かった。

「勇太！」

「勇太！」

「勇太、返事をして勇太」

「勇太あああああああつ」

「勇太」

かなは勇太の遺体を見て泣き崩れてしまった。

「うっうっうっ、勇太」

「うん、うん、うん、勇太、なぜなの、うっう」

かなは悲しくて悲しくてたまらなかった。

「勇太が死ぬなんて・・・嫌よ。

いやいや、絶対にいや・・・うっう」

母親にとって、最愛のわが子を亡くす事がこんなにも辛い事だとは・・・。

かなは残酷なこの事実を容易に受け入れる事が出来なかった。
泣いても泣いても涙が止まらない。

前崎を恨み憎む事で、かなは痛みを耐えた。

かなはひとしきり泣くと、前崎を鬼のような顔つきで睨み付けた。

「なんであんたがここにいてるの。」

「どう言う事か、教えて、うううつ・・・」

「わかった。俺が勇太にサッカーボールを渡したんや。」

「そしたら、そのボールが勇太の胸に当たって車道に転がったんや。
それを勇太が追っかけて行って、車に撥ねられたんや」

「なんであんたがボールを勇太に渡す必要があるんや」

「それは、勇太と仲直りしようと思ったからや」

「嘘や！！何か、魂胆があつたんやろ」

「魂胆なんかあれへん」

「正直に言うて」

「ほんまは、勇太を俺が引き取ろうと思ったんや。
それで、勇太と仲直りがしたかったんや」

「何であんたが今頃になって、勇太を引き取る必要があるんや」

「勇太を引き取ったら、またお前とよりが戻せる思ったんや」

「あんな事しといて、まだそんな事言ってるの、
あんたが勇太を殺したんや」

「俺や無い。殺したのは、あの運転手や。」

警察に車のナンバー連絡してあるから、すぐ捕まるわ。
殺したんはあいつや」

「あんたや。」

あんたが馬鹿な事を考えんかったら、今でも勇太は生きてるわ。
あんたや、あんたや、殺したんはあんたや。

勇太を返せ！勇太を返せ！勇太を・・・」

かなは気が狂ったようになって、前崎の襟ぐりを掴んだ。

「あんたや。あんたが殺したんや。うううううううううう」

「あほか。俺や無い。ええかげんにせんかい」

前崎はかなの凄い剣幕にたじたじになっている。

「あんたや。あんたや。あんたが殺したんや・・・ううう・・・」
かなは激しく泣いた。

「俺は警察に事情を説明せんとあかんから、これで行くわ」
「こらっ、逃げるのか。あんたが殺したんや。勇太を返せ」

かなは前崎の後姿を見送りながら、そこに泣き崩れた。

「うううううううううう・・・」

「勇太」 勇太「 勇太」 ううう・・・」

かなは肩をわなわなと震わせて号泣した。

余りにも辛い涙だった。

12話 真犯人

12話 真犯人

淳也は洛西医大付属病院に向かって自転車を飛ばしていた。

「勇太君が車にひかれた！」

淳也はかななからの残酷な知らせが信じられなかった。

受付でかななの居場所を尋ねると、淳也はそこへ走って行った。

かななが泣き崩れている。

淳也はかななを見つけると、そこまで駆けて行った。

「かなさん、大丈夫ですか」

「あつ、淳也さん。うあ〜ん、うあ〜ん、うあ〜ん」

かななは淳也の胸に泣き崩れた。

涙が止め処無く流れて落ちた。

「勇太君は？」

「うあ〜ん、うあ〜ん、あいつが殺したあああ、

うあ〜ん、うあ〜ん・・・」

「勇太君、亡くなったんですか」

「うん、うつうつうつ・・・」

かなは泣きながら首を縦に振った。

「そうだったんですか。可愛そうに。かなさん・・・」
淳也はそれ以上、何も言えなかった。

かなは淳也の胸で涙が枯れるまで泣き続けた。

前崎は事件の一部始終を警察に説明した。

前崎が通報したプレートナンバーと目撃証言から警察は容疑者を洗い出した。

京都府警K署は、事件から数日後、業務上過失致死と道交法違反（ひき逃げ）の疑いで、軽トラック運転手 伊東 利夫容疑者（49）を逮捕した。

前崎はかなに電話を入れた。

前崎からの電話とわかると、かなは物凄いきつい表情になった。

「なんやの」

「まだ、つつんしてんのか。まあええわ。
実は、犯人が捕まるらしいで」

「犯人はあんたや」

「あほか。犯人は軽トラックの運転手やんけ。」

嘘や思たら警察行つて聞いてこいや」

「真の犯人はあんたや。警察は騙せても、うちは騙されへん」

「話になれへんわ。」

犯人が捕まつたいうことを知らせてるのに、おかしいのと違うか」

「おかしいのはあんたや。」

あんたがボール渡さへんかったら、勇太は死んでへん。

うちはあんたを絶対に許せへん」

「あれは、不可抗力やろ」

「不可抗力やあれへん。あんたの意思や。」

あんたがへんな魂胆に勇太を利用しようと思ったからや。

あんたを一生恨んだるわ」

「お前、勇太が死んだから頭がおかしくなってるわ。もう、切るわ」

「人殺し。勇太をかえ・・・ツーツーツー」

かなは切れた電話に向かって

「人殺し。勇太を返せ。勇太を返せ」

と、わめき、そして、泣き崩れた。

かなは勇太が死んで以来、仕事には出ていなかった。

働く気力が無かった。

生きる希望も無かった。

かなは一日中部屋に閉じこもっていた。

焦点の定まらない目でぼんやりとしていた。

そして、時折、勇太の写真を眺めては

「勇太」

「勇太」

と、言つてめそめそと泣いていた

食事の用意は淳也がしていた。

「体に悪いから食べて下さい」

淳也が幾ら言つても、かななは頷くだけ。

3度の食事も、殆どかななは手を付けていない。

そんなある日、淳也は近くのスーパーに買い物に出掛けた。

「かななさんは何をすれば食べてくれるだろうか」

あれこれ考えながら買い物していると、意外と時間が掛かってしまった。

「あつ、いけない。もう、こんな時間だ」

淳也はかななを長い時間ひとりにはしたくなかったので、慌てて自転車で家に帰った。

「かななさん、遅くなってすみません」

淳也はドアを開けた瞬間、何か嫌な予感がした。

（空気が違う！）

胸騒ぎにあえぎながら、淳也は急いでかんなの部屋の襖を開けた。

「ああっ！！！！！！」

かんなは畳に倒れて死んだようになっている。

その前には、睡眠薬の空き瓶と数粒の錠剤、コップ、封筒が散乱している。

「かんなさーん」

「かんなさーん」

淳也はかんなの胸に耳を押し当てた。

かすかに弱い呼吸音が聞こえるようだ。

かんなは昏睡状態になっている。

「まだ、生きている」

そう思うと、急いで淳也は救急車を頼んだ。

「買い物に時間をかけずに、もっと早く帰ってくれば良かった」

「かんなさん、なぜなんだ」

「なぜ、僕のために生きてくれないんだ」

淳也は悔しさの余り、涙を流した。

涙がかすむ向こうにぼんやりと封筒が見えた。

「あつ、かなさんの遺書かもわからない」
淳也は封筒の中から一枚の便箋を取り出した。

淳也さんへ

淳也さん、本当にご免なさい。

私、勇太無しでは生きて行けないの。

それに、勇太を殺した前崎が

何の罪に問われる事も無く生きていると思うと、

私、ギュッと胸を締め付けられるようで

苦しくて、苦しくて、耐えられないの。

淳也さんと

早く夫婦になりたかった。

早く結ばれたかった。

そして、勇太と私と淳也さんが家族になる日を
夢見ていたのに。

それも、出来なくて・・・。

本当に、本当に、許して下さい。

さようなら。

かな

「かなさん・・・」

淳也は悔し涙を流した。

（勇太君を殺したのはあの男だ）

かんなの遺書を読んで、淳也はかんなと、いま同じ考えになった。

淳也は何度も何度も勇太が死んだ原因を、かんなから聞かされていた。

「真の犯人は前崎なのに、警察は何も出来ない。

こんな事が許されているなんて、私気が狂いそうよ」

淳也はかんなの言葉を思い出すたびに、それを確信した。

「警察があつた男を罪にできないなら、俺があつた男を罪にしてやる」

淳也が固く決意した。

ピーポ、ピーポ、ピーポ……。

その時、救急車が来た。

かんなは洛西医大付属病院に運ばれ、そして、緊急治療室へ。

すぐに胃洗浄などの処置が医師からかんなに施された。

かんなは無事命を取り留める事が出来た。

淳也は勇太の葬式の際に紹介された、神奈川に住むかんなの母親に電話で連絡をした。

かんなの母親は、かなり驚いた様子で、すぐに病院に行くと言った。かんなは緊急治療室から、個室に移された。

淳也はベッドで眠り続けるかんなを優しく見守っていた。

「命が助かって良かったな」

「遺書を読んでかなさんの気持ちは良くわかった。かなさんの苦しみは、俺が必ず受け止めてやる」

淳也はかなに無言で語り続けた。

夜遅くにかなの母親の綾瀬奈津子がかなの病室に訪れた。

「お世話になります。綾瀬です。かなはどうですか」

「胃の洗浄も終わって、命には別状ないみたいです。」

「今まだ眠っていますが」

「吉見さん、この度は本当にお世話を掛けましたね」

「お母さんも神奈川から来られたのですから、大変お疲れでしょう。ここに座って下さい」

淳也は奈津子に椅子を差し出した。

「ありがとうございます。座らせてもらいます」

「どうぞ」

「どうしてかなは睡眠薬なんか飲んで自殺しようと思ったのですか」

「勇太君が死んでから、ずっと泣き続けていました。」

「勇太君無しでは生きていけなかったでしょう」

「かなの気持ちもわかるけど、何も自殺までしなくても」

「うつうつ・・・」

その時、かなが呻き声を上げた。そして、かなは目を開けた。

「うっん、死なれ・・・」

「死なれへん かった・・・」

かなはうつろな目でか細く呟いた。

「かな、助かってよかったね」

奈津子が微笑みながら言った。

「ええ事なんかないわ。私は死にたかったんや」

「何て事を言うの。この子は」

「淳也さん、何で死なしてくれへんかったん」

「・・・」

「何で、何で・・・」

「そんな事できる訳ないだろう」

「何で死なせてくれへんかったん。何で、何で」

「かな、吉見さんに何て事を言うの」

「私は死にたかったんや。勇太の所に行きたかったのに。
うっうっう、うっうっう」

かなは激しく泣いた。

「勇太と私を離すなんてえ。ひどいわ。許さへん。
淳也さんを絶対に許さへん。うっうっう」

かなはそう言って泣き続けた。

「絶対に許せへんから・・・」

「グーグーグー」

「吉見さん、許してやってね。

気持ちが高ぶっているだけだからね」

「わかっています。」

僕でよかったら、幾ら当たってもらっても結構です。それで、かなさんの痛みが和らぐなら」

「吉見さん、ありがとう」

「かなさん、おとなしくなりましたね」

奈津子はかなを覗いている。

「あらっ、おとなしくなったと思ったら、

かなはグーグーいびきをかいて寝てるわよ」

「きっと、夢の中で僕に当たったのでしょう」

「そうかもしれませんね」

二人は顔を見合わせて笑った。

かなは健康が回復すると、病院を退院した。

母親の奈津子も神奈川に帰った。

かなは退院してからも相変わらず元気が無かった。

13話 死刑

13話 死刑

淳也は kanna の家を出た。

その時、kanna は不服そうな顔をして呟いた。

「何で家を出る必要があるの」

「勇太君が死んで、夫婦でないものが

いつまでもこんな形で生活するのも不自然だし。

一度、この家を出て、もう一度考え直したいのだ」

「また、結婚詐欺まがいの仕事がしたくなつたの」

「それは、無い」

「ああ、そう。それやったら、あんたの好きにしたら」

淳也はそれから大阪のビジネスホテルを転々とし、時を計っていた。
kanna の家を出てから1ヵ月後。

以前、kanna の携帯から書き写した前崎の電話番号を書いたメモを、
淳也は取り出した。

淳也は前崎に電話をすると、kanna が危篤と嘘を付いた。
そして、前崎を夜の8時にかanna の家の前に呼び出した。

8時前に前崎が車でやって来た。

淳也は車道の前の歩道で前崎を待っていた。
前崎を見つけると、淳也は皮手袋をはめた。

「かんなの具合はどうや」

前崎が車から出てきた。

「一進一退と言う所かな。」

それより、かんなさんがお礼をしたらしい」

「かんなが俺に。どんなお礼や」

「お礼はこれだ」

そう言つて、淳也は前崎の顔面に思い切りパンチを食らわせた。

バシーン。

「な、なにするねん」

「お礼がしたいんだ」

「だ、だましやがったな」

ブスーン。

淳也は、さらに前崎のボディに強烈な一撃を加えた。

前崎はたまらず前かがみの姿勢になった。

そこへ、淳也のアップercutが前崎の顎を捕らえた。

「う、うう」

前崎はよろけながら倒れた。

淳也は道路に倒れている前崎のみぞおち辺りを情容赦なく蹴り上げた。

もう一発。

さらに、力を込めてもう一発。

「う、ううう」

前崎はぐったりとなって倒れている。

道路脇にはあらかじめ用意してあったウイスキーの瓶を、淳也は取り上げた。

「さあ、宴会が始まるぞ。飲め。さあ、飲め」

淳也は無理やり前崎にウイスキーをがぶ飲みさせた。

ガブ、ガブ、ガブ・・・。

淳也は嫌がる前崎の口を力付くで左手で開けると、右手でウイスキーを流し込んだ。

ガブ、ガブ、ガブ・・・。

ヒィー　グッホン、ゴホン、ゴホン・・・。

むせたのか、前崎が咳込み出した。

ゴホン、ゴホン、ゴホン・・・。

前崎の顔と上着はウイスキーが零れたのか、濡れてウイスキーの臭いがプンプンしている。

「これ位でいいだろう」

淳也は前崎を前崎の車の後部座席に押し込んだ。

前崎は後部座席でぐったりとしている。

淳也は車を運転して時間を潰した。

午前2時頃に先ほどの場所に戻ってきた。

後方座席を淳也が見た。

まだ、前崎はぐったりとしている。

証拠を残さないために帽子を被り、皮手袋をした淳也が、ウイスキーの瓶を持って車から出た。

そして、後部座席を開けると、ぐったりしている前崎の口に、淳也は無理やりウイスキーを飲まし始めた。

「さあ、二次会だ。たっぷりと飲みやがれ」

ガブ、ガブ、ガブ・・・。

「やめてくれ。やめて・・・」

前崎は必死でウイスキーを拒否している。

「もっと、飲むんだ」

淳也は嫌がる前崎の口に、無理やりウイスキーを流し込んだ。

「もう、いいだろう。ちょっと、ここで待ってろ」

そう言い残すと、淳也は後方に止めている、あらかじめ用意していた盗難車の方へ。

そして、淳也はその車を前崎の車のすぐそばまで運転して来た。

「勇太君と同じめに合わせてやるから、待っている」

淳也は前崎を後部座席から引き摺り出した。

前崎を勇太君がひき逃げされた同じ場所に、淳也は引き摺って行った。

「何をする気や。やめてくれ」

前崎が弱弱しい声を上げた。

淳也は辺りを見渡した。

午前2時を過ぎた時間のせいか、人通りや車も走っていないかった。

「よし、いいだろう」

前崎の声を無視して淳也が盗難車に乗り込んだ。

淳也は車をかなりバックをさせてから、前崎を目掛けて発進させた。

アクセルを踏み込む。

「許してくれ」

前崎はか細く叫びながら立ち上がろうとしている。

「助けてくれ」

前崎がこちらに向かって、両手を合わせている。

バーン。

淳也は前崎をひき、走り過ぎた。

キッキキッキキー。

方向を急転換させると、倒れている前崎を目掛けて、もう一度アクセルを踏み込んだ。

グシャグシャ。

前崎は車道の中央で血を流し、死んだようになっている。

車から降りると、淳也はウイスキーの瓶を前崎の車から取り出し、

前崎が横たわっている辺りに撒いた。

そして、前崎の手に瓶を握らした。

瓶にはほんのわずかウイスキーが残っていた。

「かなさん、これでいいでしょう」

淳也がかなの自宅の方を見詰めて呟いた。

淳也は自らの手で、勇太を殺した真犯人、前崎を死刑にした。

淳也は盗難車に乗り込むと亀岡方面に車を走らせた。
途中、淳也は車を捨て去った。

（どこに行こうか）

そう呟くと、淳也はそこから姿を消した。

「あれっ、前崎じゃないの」
かなは前崎が泥酔して、車にひき殺された事を夕刊の記事で知った。

そこには、次のような記事が載せられていた。

泥酔男、車にはねられ死亡

何日午前3時ごろ、京都市西京区の市道で、大阪市西区の会社員前崎孝太（38）が血を流して倒れているの通行人が発見。

病院に運ばれたが全身打撲でまもなく死亡した。

京都府警K署は、男性が酒に泥酔し、前と後ろから来た車にはねられたと見て、ひき逃げ事件として操作を開始。

なお、事件は午前3時ごろに発生したことから目撃情報が少なく、犯人に結び付く有力な情報は得られていない模様。

新聞を読みながら、

「そう言えば、

この近くで真夜中に救急車のサイレンが幾つも鳴っていたな」と、かなは呟いた。

急いで、かなは団地の外に走って出た。

道路に出ると、2台のパトカーが止まっていた。

道路を歩いていると、花束が置いてある。

「あつ、ここだわ」

「これって、勇太と殆ど同じ場所じゃないの」

「偶然かなあ」

「親子が同じ場所で、同じひき逃げで死亡するかなあ」

「きっと、偶然じゃないわ」

「じゃ、誰が？」

「淳也さん？」

「まさか」

「きっと、そうだわ」

「なぜ、淳也さんがひき逃げを」

「真の犯人は前崎なのに、警察は何も出来ない。

こんな事が許されているなんて、私、気が狂いそうよ」

かなは自分が言った言葉を思い出していた。

「そうよ」

「きっと、そうよ」

「淳也さんは私のために前崎を警察に代わって罪にしたんだわ」

「だから、淳也さんは1カ月ほど前に家を出たのか」

「きっと、そうだわ」

かなは辺りを見渡した。

「誰もいないで良かった」

そう言つと、かなは急いで自転車置き場まで走つて行つた。

「淳也さん、そこまで私の事を」

「淳也さん、いまどこにいるの」

「智子さんが淳也さんの居所を知っているかもしれない」

かなは思い切り自転車のペダルを踏んだ。
智子の家に着いた。

たえが亡くなり、最近、かなはこの家にはご無沙汰していた。

「今日は、綾瀬です」

「あら、お久し振り」

淳也の妹の智子が顔を出した。

「母が生存中は随分とお世話になりました」

「いいえ」。

今日は智子さんにお聞きしたい事があつてお伺いしました」

「あら、何かしら」

「淳也さんの住所ご存知ないですか」

「兄さん、かなさんの家を出たの。少しも知らなかったわ」

「智子さんもご存知では無かったですか」

「ええ、聞いていないけど。」

兄さん、なぜかなさんの家を出たの」

「私が勇太を亡くして、ずっと落ち込んでいましたから、
ついつい淳也さんに当たったもんで」

「子供を亡くせば、無理ないわねえ」

「智子さん、ありがとうございます。また別の所を当たってみます」
「兄さんの住所がわかれば、私にも教えてね」

「はい、わかりました。では、智子さん失礼します」

「元気でね。さようなら、かなさん」

「さようなら」

かなは自宅を目指して自転車のペダルを漕いでいた。

（淳也さん、ご免なさい。私が悪かったわ）

（淳也さんがあんなにまで私の事を思ってくれていたのに、
私は勇太の事ばかり思い出して泣いてばかり）

（淳也さん、帰って来て）

（もう一度、やり直しましょう）

（今度こそ夫婦になれるよね）

（お願い、帰って来て）

かなは自転車のペダルを漕ぎながら、心の中で大声で叫んでいた。

14話 逃亡

14話 逃亡

勇太が死んでから1年後（実際はその1日前）

淳也は九州にいた。

あの事件以来、淳也は新聞を気にかけて読んでいた。

が、前崎をひき逃げした犯人に関する記事は掲載されていなかった。

「今日も新聞には載っていないかった」

額の汗を拭きながら、淳也が小さく呟いた。

「でも、油断は禁物だ」

スコップで土をすくい上げると、淳也は大きく放り上げた。

淳也は大牟田市で道路工事の土木作業員として働いていた。

その日、仕事が終わると、淳也は西鉄新栄町駅前にあるデパート小
筒屋に買い物に出掛けた。

そして、おもちゃ売り場で恐竜のフィギュアを買った。

100円硬貨ばかりを渡したので、店員は不思議そうな顔をしていた。

「ジョッキの中の100円玉は勇太君にプレゼントしよう
と置いていたけど、恐竜になってしまったな」

フィギュアの入った紙袋を手に提げながら、淳也は苦笑していた。

三池にあるアパートに帰りドアを開けようとしていると、隣の部屋に住む北条 サエがドアを開けた。

「あら、吉見さん、お久しぶり」

「今晚は。今日は休みですか」

「ズルよ。余り、気が滅入ったので休んだのよ。時々やるのよ」

「いやな事でもあったのですか」

「いやなことばかりよ。あつ、吉見さん、

今ひとりで飲んでいる所なの。一緒に飲まない」

「今日は遠慮します」

「そんな事言わないで、付き合ってよ」

サエはむりやり淳也の手を引っ張って部屋の中に引き入れた。

「仕方ないな。少しだけですよ」

部屋に入ると、小さな食卓テーブルがあり、その上にウイスキーの

瓶と水割グラスがあった。

「吉見さん、水割りでいい？」

「じゃ、一杯だけいただきます」

サエは新栄町のスナックで働いていた。

「私ねえ、九州は好きなのよ。」

食べる物もおいしいし、人間もいい人が多いしね」

「へえ、そうなんだ」

「でも、ひとつだけ我慢ができない事があるの」

「それって、何ですか」

「言葉よ。あの訛りだけは、どうも好きになれないの。
関西弁もそうだったけど、こちらはもっとよ」

「北条さんは、もともと関東の人ですか」

「吉見さんもそうでしょう」

「えっ、まあ」

「吉見さんて標準語でしょう。」

私、吉見さんと話をする、ほっとするのよ。

でもね、西鉄バスに乗るじゃない。

車中が方言まるだし。私、圧倒されちゃって」

「僕は気にならないですね」

「あつ、吉見さん、もう一杯どう？」

「もう、結構です。用事がありますので、これで失礼します」

淳也は帰ろうと思い立ち上がった。

サエはいきなり淳也に抱き付いてきた。

「何をするんですか」

「ねえ、いいでしょう」

「腕を離してください」

「私、前から吉見さんこうなると思っていたの」

「やめないか」

サエはその言葉を見捨て、淳也の手を両手で引っ張った。

奥の部屋のベッドに淳也を連れ込もうとしているようだ。

淳也はその手を振りほどくと、サエをベッドに力任せに押し倒した。

「俺を甘くみるな」

そう言いつつ、淳也は部屋から立ち去った。

あくる日、淳也は休みを取って、京都へ向かった。

京都駅からかんなの家の前までタクシーを走らせた。

淳也は道路から301号室のかんなの家を見上げた。

「 kannさん、ご無沙汰しています。
大分、落ち着かれましたか。

今日は勇太君の命日です。
手を合わせにきました。

逢わずに帰るつもりです。
どうか、お元気で」

そう言うと、淳也は勇太がひき殺された場所へ向かった。

淳也は恐竜のフィギュアをその場所に供えた。
そして、淳也は両手を合わせた。

（勇太君、会いに来たよ。
ジェラシック・ワールドは楽しかったな。

また、連れて行けないのが残念だ。
その代わり、これを置いておく。

気分だけでもジェラシック・ワールドに行ってくれ。

来年、また来るからな。
待ってるよ。じゃ、あばよ）

手を合わせ終わると、待たせてあったタクシーに乗り、淳也は京都
駅へ向かった。

その5分後、 kannは花束を持って勇太が死んだ場所に向かってい

た。

そこに着くと、紙袋が供えられていた。

かなは紙袋の中から、包装紙に包まれた箱を取り出し、その箱を開けた。

中には、恐竜のフィギュアが入っていた。

「あつ、淳也さんだ。

間違いないわ。

淳也さんここに來たのだわ。いつ來たのかしら」

「淳也さ〜ん」

「淳也さ〜ん」

かなは辺りを見渡し、名前を呼んだが、淳也はいなかった。

紙袋に馴染みの無い店名が印刷されているのに、かなは気が付いた。

かなは急いで家に帰り、パソコンで調べてみた。

『小筒屋』で検索すると、

『小筒屋』のホームページが出て來た。

ホームページから、『小筒屋』が九州に数店舗を持つ地方の百貨店である事がわかった。

「淳也さん、いま九州にいるんだわ」

かなは紙袋を思いを込めて抱き締めた。

（淳也さん、ご免なさい。

1年経って、やっと勇太を亡くした痛みに耐えられるようになったわ。

もう一度、やり直したいの。

やり直して、真の夫婦になりたいの。

もう一度だけ機会を与えて。

淳也さん、お願いだから、

淳也さん、帰って来て）

かなは淳也を、そして淳也の愛を、心から深く求めていた。

淳也はJR京都駅の公衆電話の前にいた。

そして、かなに電話をしようか、やめようか、迷っていた。

100円硬貨を電話機に入れ、かなの家の電話番号を押して、最後の番号で、淳也は電話をするのを止めた。

「やはり、声を聞かずに帰ろう」

そう決心すると、淳也は新幹線のプラットホームに向かった。」

淳也は博多行きのプラットホームに着いた。

出発までに少しの時間があった。

淳也はスラックスのポケットから1枚のコインを取り出した。

それは、ジョッキの中にあつた最後の100円硬貨だった。

淳也は今の生き方をコインに尋ねてみるつもりでいた。

裏か。

表か。

淳也はコインを大きく上に放り上げた。

コインは空のてっぺんでキラキラと輝いていた。

(了)

*この物語はフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648d/>

コイン

2010年10月9日02時37分発行